コードギアス 反逆のルルーシュ ～銀の翼～

じゅげむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
コードギアス　反逆のルルーシュ　～銀の翼～

【Ｎコード】
Ｎ１３７７Ｚ

【作者名】
じゅげむ

【あらすじ】
神聖ブリタニア帝国の植民地となった旧日本－エリア１１。そこで極秘裏に行われていた実験。しかしある日、Ｃ．Ｃの入ったカプセルが盗まれると同時に、その極秘研究所から脱走した２人の少年レイと少女ジル。レイは過去も未来も捨て、ただ己が望むがままに生き、ジルは己の過去を拾いながら未来を生きる。あまりにも対照的な２人の人間…。彼らはいったい何者なのか…？そして彼らが関わる世界の行方は？コードギアスのもう一つの物語。／基本４日更新／

STAGE　00　【プロローグ】

【旧日本一エリア11・極秘研究所】

「くっ・・・・!!例のカプセルが奪われたっ!!急げっ!!なんとしても取り返すんだっ!!」

研究所内ではけたたましいアラーム音と、それに負けじと声を張り上げる軍人の姿があった。
彼の名はバトレー。
神聖ブリタニア帝国第3皇子クロヴィスの命で、ここの管理、隠蔽をしている将軍であり科学者でもある。

「・・・殿下にお伝えせねば・・・・・・・・」

バトレーの顔には焦りの色が浮かんでおり、その事態の深刻さがうかがわれる。

そうして彼は踵を返し、その研究所を後にしようとした。
しかし突如奥の一室が爆発した。
驚いて彼は振り返った。

「なっ・・・！！まさかっ・・・！！」

バトレーの顔の焦りは瞬く間に恐怖へと変わる。
そしてその爆発音を聞きつけた十数人ほどの兵士が銃を構えて駆けつけた。
するとその爆煙から姿を現したのは、銀髪で綺麗なアメジスト色の瞳をしている全裸の2人の少女と少年だった。
しかし目はどこか虚ろで、まるで心がない人形のようだった。

「あぁ・・・そんな・・・・・まだ不完全だと言うのに・・・」

バトレーは絶望的な声を出して思わず後ずさった。
その様子を見た兵士たちは、あの2人がどんな人間かはわからなかったが、相当まずいものだということは理解できた。
すると突然彼らは何かにとりつかれたように、床に落ちていた鋭いガラス片をひっつかみ、兵士たちにむけて走り出した。

「うっ！！うて！！うてぇっー！！」

バトレーはそう命令すると、いちもくさんに走ってその場を立ち去

る。
目の前の2人に無我夢中で発砲する兵士はそれに気がつかない。
しかも2人はその銃弾に当たっても何事もないようにこちらに突っ込んでくる。

「なっ！！なんで死なないんだぁぁぁっっ！！！！」

その光景に兵士たちは恐れを抱き、後ずさりをしながらさらに発砲を加える。
そして2人は彼らの元へ行き着くと、次から次へと手に持った鋭利なガラス片で彼らの喉元を掻き切っていく。

「やっ！！やめてくっ・・・がぁ！！」

その場で何度も悲鳴があった。
数分後、いつの間にか辺りは血の海と化し、兵士は皆息絶えていた。
そして2人は何事もなかったかのようにその場を後にした。

ＳＴＡＧＥ　０１　【名もなき少女】（前書き）

誤字・脱字の指摘お願いします。

STAGE　01　【名もなき少女】

【トウキョウ租界　アシュフォード学園】

「はぁ・・・はぁ・・・」

一人の少女が所々血に染まった白衣のみをまとって走っていた。
彼女は銀色の髪をなびかせ、何度も後ろを振り返り、まるで何かから逃げているようだ。
とにかく遠くへ・・・
その考えだけが今の彼女を突き動かしていた。
しかしそんな彼女を突如めまいと頭痛が襲い、その場で思わず立ち止まり嘔吐し、そのまま彼女は倒れ込んでしまった。
視界が霞み、意識が遠のいていく・・・
そうして彼女は意識を失った。

数時間後ー・・・

「ん・・・ん・・・・・・・」

彼女がゆっくりと目を開けると、そこは見知らぬ天井だった。
辺りを見渡すが、ここがどこだかさっぱりわからない。
部屋は質素で、きちんと物が整理整頓されている。
クローゼットに掛かっている服からすると、どうやらここは男性の部屋のようだ。
そして彼女はベットから起きあがると、窓辺へと歩み寄り、そこから外を眺めると、学生らしき人たちが楽しそうに話しながら歩いていた。
すると突然その部屋のドアが開いた。

「ちょっ！！あなたそんな格好でっ！！」

「えっ・・・？」

自分の体を見ると、なぜか全裸だったが、彼女は全く気にしている

様子はなかった。
あわてて彼女に駆け寄る金髪の女性ーミレイ・アシュフォードは、部屋のカーテンを閉めた。
彼女の手にはバスローブがあり、どうやらこれを取りに行っていたらしい。

「ダメじゃない！まだ安静にしてなくちゃ！」

「あっ・・・はい・・・ここはどこですか？」

自分にバスローブを着せて、強引にベットまでひっぱり寝かしつけるミレイに、彼女は訪ねた。

「ここはアシュフォード学園のクラブハウスよ・・・あなた名前は？どこからきたの？」

「・・・・・・・・・・・・」

思わず彼女は考え込んだ。
なぜかうまく思い出せない・・・
いったい自分は何なのだろうか？

「名前は・・・ジル・・・・・・でもそれ以外は思い出せないんで

す・・・・」

「もしかして記憶喪失？」

「たぶん・・・・」

「そう・・・ファミリーネームは？」

「・・・わかりません・・・・・・・」

「そっかぁ・・・あっ、ちなみに私はミレイ・アシュフォード！ここの学園の生徒会長兼理事長の孫娘！よろしくっ！」

ミレイは明るい笑顔をジルに向けながら言った。
どうしてこんな自分をここまで世話してくれるのか彼女は不思議だったが、それをきくのは何故か失礼のような気がしたので、きくのはやめた。

「あの・・・私はどうしてここへ？」

「あなたはね、血だらけの白衣だけを着て学園の庭に倒れていたのよ？あなたに怪我はないようだけど・・・覚えてない？」

「いえ・・全然・・・」

怪我がないのに血まみれ？
じゃあ自分はだれかを殺してしまったのか？
そんな考えがジルの脳裏によぎる。
もしそうだとしたらこんなところにはいられない。
このミレイという人にも迷惑をかけてしまう・・・
そして彼女はここから立ち去る旨(むね)を伝えようとすると、それより先にミレイが口を開いた。

「心配しなくても大丈夫よ・・一応警察には届け出たし、確認も取ったからあなたが犯罪に関わっていたという事実もないわ」

ミレイは優しい声で、彼女の頭を撫でながら言った。
ジルはそれを聞いて安心した。
その様子を見たミレイは、突然話を切り出した。

「ジル、あなた行くところがないならどう？ここに住んで学校に通わない？どうせ身元引き受け人も必要だし、御爺様にも話はしておくから」

「いや・・・私は・・その・・ミレイさんやこの学校の人たちにも迷惑がかかってしまうかもしれませんし・・・」

「いいのよ！そんなこと気にしなくて！あなたは悪い人には見えないしねっ？」

そういってミレイはウィンクを飛ばす。
正直ジルは戸惑っていた。
自分がいることで、ミレイや、この学園の人たちに迷惑がかかるかもしれない。
だがここを出たからといって行く当てもなく、記憶もないためどうしたらいいかわからない。
そんなことを悩んでいると、それを察したようにミレイは言う。

「あなたの記憶が戻るまでここにいればいいし、もしあなたが望むなら、記憶が戻った後もここに居ていいのよ？」

彼女はベットに腰掛けてたジルの隣に座りながら肩を軽く叩く。
こんな優しい人に拾ってもらって良かったと彼女は思いながら、「はい」と少し笑って返事をした。

「よろしいっ！じゃあ今からどうする？もう一眠りしてもいいわよ？」

ミレイは満足そうに大きくうなずくと、そう提案した。

「いえ、もう大丈夫ですし・・それに動いてた方が今は気がまぎれますんで・・・」

「そうね・・・それなら一緒に今から生徒会のみんなに会いに行かない？丁度一人を除いてみんなクラブハウスにいるし、私も付きっきりって訳にもいかないから、勝手がわからないあなたのお世話も頼めるしねっ？」

「そんなっ！皆さんに迷惑ですし・・・」

「いいのいいの！会長命令だから！」

そういってミレイはいたずらっぽく笑った。
そしてジルは「（きっとみんなこの人で大変な思いをしてるんだろうなぁ）」と思うのであった。
そんな中突然部屋の扉が開いた。

「あの・・ミレイさん・・・先ほどの女性の方の具合はどうですか？」

「さっき目を覚ましたところよ、ナナリー」

それを聞いたナナリーは「そうですか」と言って、車椅子を部屋の中へ進めた。

「あなたは・・・？」

ジルが首を傾げてたずねる。

「私はナナリー・ランペルージです、よろしくお願いしますね？」

「・・・私はジル・・・よろしく」

「はい！ところで兄のベットで良かったのですか？私のベットの方が・・・」

「いいの！いいの！ナナリーは気にしない！」

ミレイはなにやらニヤニヤしていたが、ジルとナナリーがそれに気がつくことはなかった。
そしてジルはナナリーの特別な雰囲気を感じ、たずねようか迷ったが、後々に何か不都合があってはいけないので、思い切ってきいてみた。

「あの・・・ナナリー・・・あなたは・・・・」

「はい・・・私は目と足が不自由なんです・・・・」

ナナリーは、ジルがたずね終える前にそれを打ち明けた。
そんな彼女の表情はやはり暗く、悲しい物だった。

「そう・・・私にできることならいくらでも手伝うから、よかったら頼ってね？」

ジルは笑顔でナナリーにそう言ってしまい、自分らしくないなと思ったが、記憶がなく、自分を知らないのに、そんな風に感じたことが不思議だったが、嬉しそうに「はい！」と笑顔でうなずく彼女を見て悪い気はしなかった。
そしてそんな中ミレイが突然話に割り込んできた。

「そうよナナリー、ジルも今日からここに住むんだから」

「「えっ！？」」

思わずナナリーとジルがハモる。

「ナナリーもルルーシュ以外に誰かいた方が楽しいでしょ？」

「それは・・・そうですけど・・・」

「部屋はもう一つあるし、ルルーシュには私から説明しておくわ、それに彼女は記憶喪失で行くあてがないのよ」

「記憶喪失・・・？そうなんですか・・・あの、こんな私なんで迷惑がかかると思いますが、よろしくお願いしますね？」

「えっ・・・？あっ、よろしくお願いします・・・」

勝手に進んでいく話を止めるすべはなく、ジルは少し困ったが、別に不満なことはなく、むしろありがたかったので、その提案を受けることにした。

「じゃあ今から生徒会室に行くけど、ナナリーは？」

「そうですね・・特に用事もないのでご一緒します」

「なら決定っ！生徒会室にレッツ・ゴー！！」

「じゃあナナリーの車椅子は私が押すね？」

「あっ、はい、お願いします」

なぜかハイテンションなミレイを先頭にして、ジルはナナリーと車椅子を押しながら部屋を出た。
そしてその夜にルルーシュがベットで寝ようとすると、なぜか良い匂いがしてなかなか寝付けなかったというのはまた別の話・・・

【クラブハウス・生徒会室】

「ねぇ・・・さっきの子、大丈夫かなぁ？」

「シャーリー心配しすぎだって、怪我は別になかっただんだろ？」

「うん・・・でも服は血だらけでまるで撃たれたみたいにたくさん

穴が空いてたし・・・」

「そんな穴だらけになるほど撃たれてたらその子とっくに死んでるって！」

「・・・そうだね」

ここはアシュフォード学園生徒会室。
その中でオレンジ色の髪の少女、シャーリーと、青い髪の少年、リヴァルが、数時間前に見つけた少女について話していた。
発見者はシャーリーで、その後、ミレイと一緒にルルーシュの部屋に（半ばミレイの嫌がらせで）運んだのだ。
ちなみにシャーリーはその時、ルルーシュの部屋に全裸で寝かせた少女を羨ましいとか思ったり、なにか興奮したりで、いろいろと悶々していたというどうでもいい情報も付け加えておこう。
一方リヴァルはルルーシュに置いてきぼりにあい、一人寂しくバイクを押していたのであった。

「でもその人危険じゃないの・・・？」

近くの別の机でパソコンのキーを叩いていた緑色の髪をしたメガネをかけた少女、ニーナが不安そうに2人にきいた。

「一応警察には届けたし、それにそんな事件は起こってないって言

ってたから大丈夫だよ！」

「うん・・・」

シャーリーの言葉を聞いて安心したニーナはホッとした。
そしてそんな時、部屋の扉が開き、ミレイが入ってきた。

「会長！あの子は！？」

「大丈夫よ、さっき目を覚まして今ここにいるわ・・入ってきていいわよー？」

そういってミレイが呼びかけ、一歩右に寄ると、その後からナナリーのと車椅子を押しながら、バスローブを着た銀髪のアメジスト色の瞳をした少女が入ってきた。
それを見たリヴァルは「わぁお・・・」と言ってしばらく見とれていた。

「私、シャーリー・フェネット！水泳部兼生徒会役員！よろしくね！」

シャーリーはジルの元に駆け寄ってきて手を握りあいさつをした。

「あっ！オレはリヴァル・カルデモンド！書記ね！」

彼女に見とれていたリヴァルはハッ！としてあいさつをする。

「あっ・・・あの・・・ニーナ・アインシュタインっていいます・・・」

なぜか顔を真っ赤にしてもじもじしながら自己紹介をするニーナ。

「私は・・・ジル・・・・・」

急なことに戸惑いながらも自己紹介をする。
そしてそんな彼女をカバーするようにミレイが付け加える。

「あのね、彼女、記憶喪失なのよ」

「「「えっ！？」」」

ミレイの発言に驚く3人。

「それでね、私ひとりじゃ彼女が困ってる時の手助けにも限界があるから、あなた達にもお願いしたいの」

「もちろんですよっ！」

「まかせてくださいっ会長！！」

「うん・・・」

「よっ、よろしく・・・」

快く引き受けてくれた3人に、ジルは頭を下げた。

「そーだっ！！彼女、ファーストネームはあるけど、ファミリーネームがないの・・でもそれじゃなにかと不便もあるだろうから、みんなで決めよーっ！ってことでっ！」

そういってミレイはジルと3人を座らせ、ナナリーの車椅子を机によせると、「今日の議題は、ジルちゃんのファミリーネームでぇーっす！！」となにやら勝手に会議を始めた。

「じゃあ、だれかいい案がある人っ！」

「はいっ！」

ミレイが発言を促すと、まずはシャーリーが手を挙げた。

「私は『バレンタイン』がいいと思いますっ！」

「つまり・・・ジル・バレンタイ・・・いやいやっ！それはいろんな意味でまずいでしょっ！？某ゲームをまるまるパクってるし！」

というわけで即却下。
そして次に名乗りを上げたのはリヴァル。

「オレは『ヴィルヌーヴ』が良いと思いますっ！」

「ジル・ヴィルヌー・・・ってそれもいろいろまずいわよっ！Ｆ１のレーサーじゃないっ！！」

これも即刻却下。
そして次にニーナ。

「えっと・・・私は・・・・・『（あまりの内容に自主規制させていただきます）』」

「だめ！だめ！だめ！ぜーったいだめっ！！！」

いろいろとツッコミ疲れて呼吸が荒いミレイ。
そして最後にナナリー。

「そうですね・・・『フランゾワース』なんてのはどうでしょう？」

「いいわねっ！流石ナナリー！！どっかの3人とは大違い！」

ミレイに褒められたナナリーは嬉しそうに頬を赤らめる。

「あなたはどう？これでいい？」

「はい、なんかお花の名前みたいですてきです」

「よしっ！なら決定！あなたの名前は今日から『ジル・フランゾワース』だっ！！」

満足そうにミレイはうなずいた。
そんな光景を見ていたジルは、なんだかおかしくなり笑い始めた。
すると他のメンバーもそんな彼女につられて笑い出すのであった。

その夜―・・・

ジルはナナリーと一緒に夕食を食べていた。
ルルーシュが今夜は遅くなるとシャーリーに伝言していたので、先に食べることにしたのだ。

「へぇ、あなたのお兄さんってそんな人なんだ」

「はい、料理なんかもすごく上手なんですよ？」

そうして2人が談笑していると、部屋の扉が開いて、黒髪でアメジスト色の瞳の少年、ルルーシュが入ってきた。

「ただいまナナリー」

「おかえりなさいませ、お兄様」

ナナリーは彼を笑顔でむかえた。
そして彼も笑顔を返すが、どこか疲れて、思い詰めているようだった。

「あっ・・あの・・・・・・」

「大丈夫、会長から話は聞いてるよ・・オレはルルーシュ・ランペルージ、よろしく」

「あっ、ジル・フランゾワースです・・・よろしくお願いします・・・」

「あぁ・・・じゃあオレは先にシャワーを浴びてくるから、ゆっくりしてくれ・・・」

そういってルルーシュは部屋の奥へと消えていった。
ジルは何かを彼に感じ、その後ろ姿をしばらく見つめていた。

ＳＴＡＧＥ　０１　【名もなき少女】（後書き）

ホントはもう少し書きたかったですね・・・

でもだらだら引きずってたらなんかめちゃくちゃになっちゃいそうだったんで・・・ｗ

てか途中からネタでしたね。

バイオハザードはどうしてもいれたかったんですよっ！

そうしたらもう・・・結果は見事に・・・ｗ

次話はもう一人の少年のお話ですっ！！

どーぞお楽しみにっｗ

ＳＴＡＧＥ　０２　【悪魔の目覚め】（前書き）

＊誤字・脱字の指摘、よろしくおねがいします＊

ＳＴＡＧＥ　０２　【悪魔の目覚め】

【特別派遣響導技術部・倉庫】

「ふんふふ～んふ～んふ～ん♪」

一台の大型車両の横で、どこか拍子ぬけた雰囲気のメガネをかけた男―ロイドは、鼻歌を口ずさみながら、上機嫌で目の前のパソコンのキーを淡々と叩き続ける。
彼はブリタニアの宰相であり、第二皇子シュナイゼルお抱えの特別派遣響導技術部、通称『特派』の主任研究員である。
そんな彼がなぜこんなにも上機嫌なのかというと、原因は彼の開発したＫＭＦ、ランスロットにあった。
この機体は、世界で唯一の第七世代型ＫＭＦであるのだが、あまりにハイスペックを追求したため、今までこれを乗りこなすデバイサーがいなかった。
しかし、先ほどのシンジュクでの事件の際に、素晴らしいデバイサー（パーツ）を見つけたのだ。
それは、枢木スザクという、イレブン、もとい名誉ブリタニア人だ

が、自身の自信作であるこの機体を乗りこなす人間なら、正直彼は誰でもよかったのだ。
そしてロイドはそんな中から得られた戦闘データを解析している最中なのだ。

ガラガラ・・・ガッシャーンッ！！！

そんな中、突然倉庫の奥の方で大きな物音がした。
ロイドはその物音に驚き、ぶつぶつと文句を言いながらも、気になって様子を見に行った。
するとそこには血だらけのボロボロの軍服だけをまとった少年が倒れていた。

「あはぁ！セシルくん～！！」

ロイドはまるで何か面白いおもちゃでも見つけたかのようにその少年を見ると、大声で倉庫に止まっていた大型車両の中にいる人間を呼んだ。
そして中から出てきたのは同じ特派の研究員兼ロイドのお守り役である女性―セシルである。

「はーい！なんですか、ロイドさ・・・ってキャアァー！！」

呼ばれたセシルがひょっこり顔を出すと、そこには少年が横たわっ

ており、思わず彼女は悲鳴をあげた。

「ちょ…大丈夫なんですかっ！？」

慌ててかけより、脈を計るセシル。

どうやら生きてはいるようだ。

「いっ！急いで医務室へ！！ロイドさんっ！！」

「へっ？」

「手伝ってくださいっ！」

「えぇ～・・・なんで僕が・・・」

「何かいいました？」

「い・・いえ、なにも・・・」

めんどくさそうに言ったロイドにセシルが笑顔で脅す。

それを見た彼は、一瞬背後にこの世の思えないものが見えた気がした。

そして渋々ながら、ロイドは少年の両肩を、セシルは両足を持ち上げ、半ば引きずりながら、倉庫に設置された簡易的な医務室へと運ぶ。

「酷い・・・服にこんなにも穴が・・・きっと誰かに撃たれたんですね・・・」

「えぇ～、でも傷1つないよ？彼」

「えっ？」

ロイドが少年の着ている服をめくり上げて、内側の身体を見る。
それを聞いたセシルも、ロイドの隣から覗き込む。
確かに、服にはたくさんの銃弾の跡と、大量の血液が付いているのにも関わらず、彼には一切の傷がない。
撃たれて死んだ誰かの服を着た、という考えもあるが・・・

「とにかく警察に・・・」

「あはぁ～、でもこの子、軍の制服を着てるんだから、こっちで軍のリストから洗った方が早いんじゃなぁい？」

「あっ、確かに・・・じゃあさっそく調べてみます！それで、この

子は・・・？」

「まぁ目が覚めるまでここに寝かせておけばいいよ」

「わかりました」

そういってセシルはパソコンを取りに一度、車の中に戻った。
そしてロイドは興味深そうにその少年を見ていた。

２人の男が、木製の小舟に乗って海を漂っていた。
１人は甲冑を着た銀髪で、アメジスト色の瞳をした男。
彼の目はどこか虚ろで、遠くの何かを見つめているようだった
もう１人は、黒いマントに身を包み、フードを深くかぶっているため顔が見えず、男か女かも不明である。
辺りは濃い霧に包まれ、１m先すら視界がきかない。

しかし小舟は誰かが漕いでいるわけでもないのに、まるで目的地を知っているかのようにゆっくと進んでいる。

そしてしばらくすると大きな揺れが小舟を襲った。

どうやら浅瀬に乗り上げたようだ。

2人が小舟から降りると、脛の辺りまで足が海水に浸かった。

少し歩くと、小さな浜辺に辿り着き、その奥には森が生い茂っていた。

すると突然、銀髪の男の顔が怒りに歪んだ。

声は聞こえないが、彼はもう1人の方を振り返り、何かを怒鳴っている。

もう1人の口元は見えないが、会話をしているらしい。

彼は怒鳴るのをやめたが、まだ顔は怒りに満ちている。

しかし、だんだんと顔から血の気が引いていき、青ざめてゆく。

そしてもう1人の男は引き返していき、霧の中へと消えた。

取り残された彼は、踵を返し、森の中へ入っていった。

どのくらい歩いただろうか？

目の前に突如、開けた場所が現れ、奥には洞窟があった。

彼は何か得体のしれないものを感じ、帯刀していた剣≪つるぎ≫を抜いた。

警戒しながら、ゆっくりと洞窟の中に足を進める。

だがそこにはただ一つ、大きな石の扉のようなものがあるだけだった。

その扉の真中には、鳥のような不思議な紋章が彫られている。

彼はその扉に恐る恐る近づき、手を伸ばしす。

そしてその手が触れた瞬間、辺りは眩い光に包まれた・・・

「！！！！痛っ！！」

「ひでぶっ！！」

そこで彼は目を覚ました。
そして勢いよく起き上がったせいで、彼を覗いていた男と頭が正面衝突した。
どうやら今までのは夢だったらしく、痛みで現実に引き戻された。
そんな彼と同じように痛みでその場にうずくまる・・・それはロイドだった。

「どうしたんですかっ！？」

ロイドの奇声を聞いたセシルが慌ててかけつけた。

「・・・な・・なんでもないです・・・・」

ロイドが涙目で答える。

「ご・・・ごめん・・・」

同じく涙目で頭を押さえる少年。

「い・・いいよ・・・覗いてた僕も悪いし・・・・・でも、もうちょっと起きるタイミング考えてよ・・・」

「それよりあなた、大丈夫？」

「あのぉ～・・・僕の心配は・・・？」

セシルは痛がるロイドを半ば無視して少年に駆け寄る。

「あなた、名前はなんて言うの？」

「名前は・・・・レイ・・・でもファミリーネームはわからない・・・」

「わからない・・・？じゃあどこから来たとかは？」

レイは必死に思いだそうとする。

しかし目を覚める前の記憶が一切わからない。
一体自分は誰で、なぜここにいるのか・・・

「君はその服を着てこの倉庫に倒れてたんだよ？」

痛みから復活したロイドが、脇の机に置いてある血だらけでボロボロの軍服を指差した。

「・・・全然」

「そう・・・記憶喪失なのかしら・・・・あっ、私はセシル・クルーミーよ・・そしてこっちがロイドさん」

「どぉ～もぉ～」

ロイドはヘラヘラしながらズイッと彼に顔を寄せた。

「あのさぁ～、君、ＫＭＦの騎乗経験は？」

「・・・はい？」

「ロイドさんっ！」

「いいじゃなぁい、この子がもしＫＭＦのパイロットならそれがきっかけで思い出すかもよぉ？」

ＫＭＦ・・・記憶はないが、なぜか操縦の知識だけは頭に残っていた。
そして悪びれもせずロイドは話を続ける。

「君が気絶してたときにいろいろ調べさせてもらったんだけど、なかなかいい体つきだし、一回シュミレーターしてみない～？」

「いいの・・・？」

もし自分がＫＭＦのパイロットであったなら、ロイドの言うように、記憶を取り戻すきっかけになるかもしれない・・・

「待ってくださいロイドさんっ！そんな誰かもわからない一般市民に「大丈夫大丈夫！主任は僕だし、いざとなったら責任もとるから～」」

そしてセシルの反対を強引に押し切り、レイのＫＭＦシュミレーションは決定した。

１時間後―…

『どうレイ君？準備はいい？』

「いいですよ、Ｍｓ．セシル・・・」

彼は黒のパイロットスーツに身を包み、シュミレーターのコックピットに座っていた。
操縦知識はあったが、念のために教本も読んだ。
するとそこにはＭＶＳやブレイズルミナスなどという見たことのない知識もあったので、見ていて正解だな、と彼は思っていた。
おそらく新システムなのだろう。
２人に詳しく話を聞くところによると、特別派遣響導技術部は、兵

器の開発を目的としているのだから、当然と言えば当然なのだが・・・

『今回、レイ君が使用するナイトメア「Ｚ－０１　ランスロット」、私たち特別派遣響導技術部が開発した、世界で唯一の第七世代型ＫＭＦよ』

『まぁつまりは僕の最高傑作ってこと』

セシルの通信にロイドが割り込む。
彼女は、いきなりこんなハイスペックな機体でシュミレートするなんて・・・と思いつつロイドを見たが、彼の顔にはそんな心配事は一切見えない。
そんなロイドを見た彼女は、諦めて話を続けた。

『では、今回のミッション内容を説明します。戦場は市街地を想定し、敵はサザーランドが４体、これを制限時間１０分以内で撃破してください』

「りょーかい」

『レイく～ん、ここは「イエス・マイロード」って言ってもらわなきゃ気分がでないでしょ～？』

「（シュミレートに気分は必要なのか・・・？）」と思いつつ「今度から気をつけます」とロイドに返事をして、操縦桿を握った。

『では、これよりシュミレートを開始します』

セシルの合図とともにブザーが鳴り、敵のサザーランドが現れた。

「すっ・・すごいですね・・・・・」

「おぉ・・・」

シュミレート画面を外で見ていたセシルとロイドはその様子に驚いた。

というのもほんの一瞬で勝負がついたのだ。

目の前に現れた４機のサザーランドの斉射を掻い潜り、大きく跳躍した後、ハーケンを飛ばしながら両腕に持っていたＭＶＳを投げて４機全てを一瞬で沈黙させた。

制限時間は９分４６秒も余っている。

「適合率９２％・・・」

「でもスザク君には及ばないかぁ～」

セシルはその高い数値に驚き、ロイドは少し残念そうに言った。

『あの・・・これで終了・・・・・・？』

レイから通信が入る。
声からは物足りないといった雰囲気が感じ取られる。

「あなたがまだ続けたいなら続けてもいいわよ？」

『じゃあお願いします・・・・・それと・・・もっとレベルを上げてもらえると・・・・・』

それをきいたロイドはなぜか笑いだし、セシルは何とも言えない顔をしていた。

「じゃあ一気に上げるわよ？」

『お願いします』

ミッションナンバー？

戦場：市街地
敵部隊：サザーランド２８機、機動戦闘車５４台
制限時間：５０分

とシュミレーターのコックピットの画面に表示され、開始のブザーが鳴った。
それと同時にどこからともなく十数機のサザーランドが現れ、彼のまわりを囲み、アサルトライフルで撃つ。
しかしそれがランスロットに当たることはなく、右腕のハーケンで宙に飛びあがり、素早くそれを巻き上げると、正面にいた２機のサザーランドに再びハーケンを発射した。
すると見事二つとも命中し、そのまま地面に崩れおちたサザーランドに食い込んだハーケンを巻き上げると、勢いよく地面に降下し、脇にいた別の２機のサザーランドをＭＶＳで真っ二つにする。
しかし、さらにその後ろから残ったサザーランドが銃弾を放ち、援軍として何十台もの機動戦闘車がランスロットに迫る。
それを見たレイはシールドで防ぎながら一度狭い路地に逃げ込み、サザーランドがそれを追いかける。
ランスロットはランドスピナーを使い、両脇のビルを昇っていくと同時に、ＭＶＳで側面を壊していく。
その下にいたサザーランドはアサルトライフルを上に向けるが、落ちてきた瓦礫に潰されてしまった。
追ってきた大半のサザーランドはがれきの下敷きになったが、まだ数機生き残っており、ランスロットはそれらに向けてハーケンを放

ち、無力化していく。
そしてその狭い路地からでると、待ち伏せしていたようにサザーランドがスタントンファをランスロットに叩きこむ。
だがそれをしゃがんで避けると、脚部をＭＶＳで切り捨て、持っていたアサルトライフルを奪い、それでコックピットを打ち抜いた。

『すごいねぇ～、君』

突然ロイドが通信を開く。

「そうですか？まぁ機体のおかげってのもあるんですけどね」

謙遜するレイだが、何故か笑顔である。
しかもロイドと会話しながらも次々とサザーランドや機動戦闘車を破壊していく。
彼は自分がこれほどまで出来るとは思っていなかった。
しかもこの機体は素晴らしい。
まるで自分の手足のように思い通りだ。

「フフフ・・・」

思わず笑い声が漏れる。
そして結局彼は全ての敵をノーダメージの中２０分で無力化し、シュミレートを終えた。

「いやぁ～、君も最高だねぇ～」

シュミレーターから降りた彼にロイドが言った。

「お疲れ様、でも本当にあなたはすごいわ・・でも軍のデータにあなたの名前はなかったのに・・・」

セシルは彼に飲み物とタオルを渡しながら不思議そうに言った。
確かに彼女の言うとおりだ。
こんなにもＫＭＦの操縦知識があるというのに、それを扱うブリタニア軍の騎士のリストに自分はいないのだ。

「（じゃあなんで僕はこんなに・・・）」

レイはどれだけ考えても答えは浮かばなかった。
そして彼は考えることをやめた。
所詮ただの記憶だ。
ないと言って別段問題になるわけでもない。
それに彼は自分の生きる道を見つけた気がした。
シュミレーターとはいえ、あの戦場の高揚感・・・
相手を破壊するたび心地がよかった。
そして彼は決めた。

「Ｍｒ．ロイド・・頼みがあります」

「ん？なんだい？」

「僕をここに置いてください」

「いいよ」

「早っ！！」

ロイドの即答に思わずセシルがつっこむ。

「いやぁ～、だって彼も優秀なデバイサーだし、今度新しい子が一緒に自作のＫＭＦを持ってくるから丁度いいんじゃなぁい？」

「えっ！？そうなんですか！？」

「言ってなかったけ？」

「きいてませんっ！！」

「あら失礼、ってことで君の身分はこっちでなんとかするから・・・
ひっ！ごめんなさいごめんなさいっ！」

あまりに適当なロイドについにセシルの堪忍袋の緒が切れ、ロイドが目の前でボコボコにされていく。
レイはそれを見ながらこの先に大きな不安を抱えるのであった・・・

ＳＴＡＧＥ　０２　【悪魔の目覚め】（後書き）

戦闘シーンって難しい…うん。

さぁ今度はもう一人の男の子の登場です。

こっちの方はなかなかつかみどこのないキャラを目指したんですけど…

それになぜか２話より３話の方が先に下書きができちゃったんですよねｗ

でわ、最後までご愛読ありがとうございましたｗ

（いや、完結じゃないですからねっ！？）

ＳＴＡＧＥ　０３　【レイの興味】（前書き）

＊誤字・脱字の指摘、お願いします＊

ＳＴＡＧＥ　０３　【レイの興味】

「枢木スザクが捕まった―…」

その知らせを聞いたロイドは半狂乱だった。
「せっかくの僕のパーツがぁぁっ！！！」と一日中言っているのだ。
そのたびにセシルの笑顔の鉄拳制裁を受けるのが、ここ最近の日課となっていた。
レイは別に彼が処刑されようがどうでもよかったが、ロイドやセシルの話によると、彼の適合率は９４％で、自分の９２％よ適合率が２％ほど良いらしい。
２％とは傍≪はた≫から見たらたいしたことはないかもしれないが、７０％から８０％まで適合率を上げるなら、それこそ努力は必要だが、そこまで難しいことではない。
しかし、９０％台に入ったとたん、１％でもそれを上げることは格段に難しくなる。
それは努力に加えて、その者自身の才能が必要になるからだ。

そしてレイは、自分より優秀な彼がどんな人物かということには少し興味がある。
そんなことを考えていた彼は、手に持っていたロイドに頼んで作ってもらった自分の戸籍の情報を、倉庫2階のブリッジの手すりに座って見ていた。
名前はレイ・チェスター。
自分ではなかなか気に入っていることは、ここだけの秘密だ。

「・・・ロイドちゃーん!!枢木スザクに会いたいんだけど、やっぱ無理？」

レイは何の躊躇もなく2階のブリッジから飛び降り、見事ロイドの前に着地する。

「・・・君よく骨折しないね」

「痛いけどね」

ロイドが落ちてきた彼にそういうと、レイは笑って答えた。

「まぁいいんだけどさぁ～・・・面会は君じゃ無理だね、まだ正式に騎士公に任命されたわけでもないし・・・」

「そっかぁ・・・残念だなぁ～・・・」

「あっ、でも今日、彼、護送されるみたいだから見ることはできるかもね」

ロイドは思い出したように言った。

「ふ～ん・・・」

レイは一瞬心の中で、仮面を被って護送車を襲い、枢木スザクを強奪しようかと思ったが、あまりにも馬鹿馬鹿しかったので止めた。しかし本当にそんな馬鹿馬鹿しいことをやってのける人間がいるとは、その時の彼は知る由≪よし≫もなかった。

そして護送予定時刻―…

『ご覧ください・・沿道を埋め尽くした人だかりを』

ＴＶ中継で護送の様子を実況するアナウンサー。
沿道は民間人の見物エリアとして開放されていた。
その道は下にモノレールが通っており、橋のような構造になっていた。
レイは後の方で来たため、後ろの方でぴょこぴょこしていた。

「・・・もっと早く来るべきだったなぁ・・・全く見えないじゃん」

辺りをキョロキョロと見渡すと、道の両脇に橋を支えるアーチを見つけた。
しかたなくレイはまるで忍者のように軽々とアーチの天辺に登り、その上から見学することにした。
そして丁度その時、政庁の方から、周りをサザーランドで囲まれた護送車が現れた。

「へぇ～・・・あれが枢木スザクかぁ・・・」

護送車の上で、拘束具を着て、首に何やら装置を付けた少年が、２人の兵に銃をつきつけられて立っていた。
すると突然護送車とサザーランドが停止した。

「ん・・・？ってぐふぉっ！！！」

なぜこんなところで止まったのか不思議に思ったレイは、思わず身を乗り出して落ちそうになる。
それはさておき、護送車が進む方向から1台の白い車が走ってきた。
どうやらあれはクロヴィスの御料車を模した車のようだ。

「（相当ふざけてるなぁ・・・でもこれで面白くなりそうだ♪）」

レイはそう思いながらニヤリとした。
そして護送車の前で停止したそれのブリタニア国旗の垂れ幕が燃え、そこには黒い仮面を被った人物が立っていた。

「私は・・・ゼロ」

仮面の人物は自らをそう名のった。
そしてクロヴィスの葬儀の際にＴＶで何やら演説していた男・・・ジェレミアだっただろうか？
彼が空に1発、発砲するとナイトメアＶＴＯＬ　Ｔ４で空で待機していた数機のサザーランドが偽御料車を囲む。
だがゼロはそれに動じることはなく、手を高く掲げ、指を鳴らした。
すると後ろの車装が真っ二つに割れ、その中から大きなカプセルが現れた。
それを見たジェレミアの表情は、驚き、恐れ、狼狽している。
なにやら相当危険な物らしい。
しかしジェレミアは勇敢にも射殺命令を出そうとするが、それを遮るようにゼロが口を開く。

「いいのか？公表するぞ・・・オレンジを」

その言葉に周囲の人々がざわつく。

「オレンジ・・・？なんかの暗号？」

レイもゼロが何を言っているのかさっぱりわからず、「（リフレインでもやってんののかなぁ？）」と心の中で思っていた。
ゼロはそんな周りの声などまるで気にせず、運転手に合図を送り、車をゆっくりと前進させる。

「私が死ねば、公開されることになっている・・・」

「なっ・・・なにをっ・・・！？」

「オレンジ」という単語に全く心当たりのないジェレミアはただただだうろたえている。
すると突然ゼロの仮面の左目の辺りがスライドして開いた。

「そうされたくなければ『全力』で私たちを見逃せっ！！そっちの男もだっ！！」

そしてその奥の瞳に宿った絶対遵守の力がジェレミアを支配した。
こうして後々の世まで語り継がれるオレンジの転落人生が幕を開けた。

「ふんっ！いいだろう！その男をくれてやれっ！」

「なっ！ジェレミア卿！！今なんとっ！？」

「その男をくれてやれっ！！誰も手を出すなっ！！」

「どういうことだジェレミア！！そんなことは計画に「キューエル卿！！これは命令だっ！！」」

ジェレミアの決定に他の純血派メンバーから抗議の声が上がる。
しかしジェレミアはそれらに有無も言わさない。
こうして枢木スザクは解放された。
そしてゼロは手に持っていたスイッチを押した。
するとカプセルから紫色の煙が噴出し、それを見ていた群衆はパニックになり、我先に逃げ出す。
その混乱に乗じてゼロとスザクと運転手は沿道から飛び降り、下で控えていたＭＲ－１がハーケンを射出。
それにつけた布をクッションとして着地し、そのまま下のモノレールに乗り込んだ。

その間も純血派のメンバーはそれを必死に阻止しようとするが、それをさらにジェレミアに阻止されてた。

「いいねぇ・・・じゃあ僕もっ・・・！」

その様子を見ていたレイは、そのモノレール目がけて飛び降りる。
２０ｍほど落下した彼は、見事モノレールの上に大きな音を立てて着地した。
どうやら中の彼らは気付かなかったようだ。
そしてモノレールは発進し、猛スピードで逃げるのであった。

【とあるゲットー】

ゼロとスザクと運転手に扮していたカレン達が逃げ込んだのは、ゲットー内のとある廃劇場だった。

「まさか本当に助け出すなんて・・・」

「なんなんだ、あいつは？」

「馬鹿馬鹿しい！あんなハッタリが何度も通用するかってーのっ！」

その廃劇場の外で、扇グループのメンバーが口々に謎の仮面の男、ゼロについて話していた。
そしてそのグループのリーダーである扇要が口を開いた。

「しかし認めざる得ない・・彼以外の誰にこんなことができる？日本解放戦線だって無理だ・・・少なくとも僕には出来ない・・・みんなが無理だと思ってい

たブリタニアとの戦争だって・・・やるかもしれない・・・・・彼なら」

それを聞いたカレンは思わず劇場の奥を振り返った。
彼は言った・・やるなら戦争だ！と・・・
もし本当にそれを彼が成し遂げようとしているのだあれば、お兄ちゃんも・・・
そんなことを考えていたカレン達の会話の様子をを柱の影で見ていたレイは、そのままこっそりと劇場の奥へと入って入った。

「相当手荒な扱いを受けたようだな・・・」

その奥はゼロとスザクしかおらず、２人は話をしていた。

「やつらのやり口はわかっている、枢木一等兵・・・ブリタニアは腐っている」

なぜか彼が発した「ブリタニア」という単語には、とてつもない絶望が感じられた。
スザクはそんな雰囲気を前にも感じた覚えがあった・・・まるでルルーシュみたいだ。

「君が世界を変えたいなら、私の仲間になれ」

「君は・・・本当に君がクロヴィス殿下を殺したのか？」

「これは戦争だ、敵将を討ち取るのに、理由がいるか？」

「毒ガスは？民間人を人質に取って！」

「交渉事にブラフは付き物・・・結果的には、誰も死んでいない」

「結果・・・？そっか・・そういう考えで・・・・・ふっ・・・」

なんとなく彼の考えがスザクにはわかった。
ますます彼はルルーシュみたいだな・・・だけどそんなことは流石にありえない。
そう思った彼は自嘲気味に笑った。

「私のところにに来い・・・ブリタニアは、お前が仕える価値のない国だ」

ゼロがスザクに手を差し伸べる。
スザクは別に彼が嫌いではなかった。
しかし7年前に自分がしてしまった「罪」・・・
きっと彼のやり方は間違っているのだ。
僕にはよくわかる。
だから・・・

「そうかもしれない・・・でも、だから僕は価値のある国に変えるんだ！ブリタニアの中から！」

「（へぇ～、あの子そんな風に思ってたんだぁ～）」

レイはゼロとスザクの会話を影から見ていた。
「ブリタニアを中から正しい方法で変える」
それが彼の理想なのだろう。
彼は別にそれを否定はしない。
理想とは欲望だ。
良くも悪くも人間を動かすための動力源なのだ。

「（まぁ彼も面白いけど、今は・・・）」

そう思いながらレイはゼロへと目を向けた。

「ばっ・・・！馬鹿かお前はっ！！」

彼に背を向けてこの場を去ろうとするスザク。
ゼロ・・・いや、その仮面の下のルルーシュは、思わず怒鳴ってし

まった。
どうしてこんなにも彼はかたくなに自分を拒むのか。
昔はもっと自分主義のやつだったのに、今は他のイレブンや名誉ブリタニア人のために死ぬなどと言っているのだ。

「昔、友達にもよく言われたよ・・・この馬鹿って・・・」

スザクは懐かしそうに目を細める。
その言葉にルルーシュは思わず口を噤≪つぐ≫んでしまう。
昔から馬鹿なところは相変わらず変わっておらず、彼の頭を悩ませる。
そしてスザクはもう一度その場で振り返った。

「君を捕まえたいが、ここでは返り討ちだろうからね・・・どうせ殺されるなら、僕はみんなのために死にたい・・・・・でも・・・」

スザクは再び歩き出す。

「ありがとう・・・・・・助けてくれて・・・」

「（・・・・・このっ・・・・！馬鹿がっ！！！）」

ゼロはその様子をただただ唇を噛みしめながら見送ることしかでき

なかった。

「あ～ららっ、ふられちゃったね？」

「なっ！！だれだっ！？」

そんなゼロの背後から突如声がした。
彼は驚いて慌てて振り返ったが、辺りが暗いせいで相手の顔は全く見えない。
だが声からしておそらく男だろう。

「・・・いつからそこにいた？」

「んっ？最初から♪」

なんなんだこのイレギュラーは・・・
ゼロは頭の中で混乱していたが、それを表に出すことはせず、あくまで冷静を装っていた。
相手はそんなことを知ってか知らずか、なにやら楽しげな表情を浮かべていた。

「あのテロリスト達の仲間ではなさそうだな・・・私を捕まえに来たのか？」

「捕まえる？まさかまさか！そんなつまらないことしないよ？」

男が白々しく答えた。

「・・・・・・・そうか・・・だが、お前を生かしておく理由はない・・・死ね！」

ゼロは仮面のギミックを発動させると、絶対遵守のギアスを男に冷酷無慈悲な命令を下す。
すると男は急にうつむく。
そして・・・

「・・・・・・・・・・・ぷっ・・・・・・ぷはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ――――――！！！！！」

男は死ぬどころか、その場で腹を抱えて笑いだした。

「（なっ・・・！！きかない・・・だとっ・・・・！？）」

ゼロはその得体の知れない男に焦っていた。
この力は例え暗くて顔が見えなくても、遮るものさえなければ効果

はあるはずなのだ。

「ぷっ！そんな『死ねッ！』なんて自信満々に言われても普通死なないよ？本当君って面白いね？」

どうやら男は笑いすぎて涙が出たらしく、手で顔をぬぐいながらゼロに言った。

「くっ・・・！それでお前は何の用だ！？」

「えっ？いやぁ、本当は枢木スザクに用があったんだけど、この様子じゃきっと無罪放免で釈放だろうから今話す必要はないかな？ってね・・・それに

君も面白そうだし興味があるのさ♪」

「・・・いったいお前は・・・・・」

「さあね？自分で考えな♪じゃあゼロ、またどこかで・・・」

そう言って男は踵を返して、暗闇の中へ消えて行った。

「（なんなんだあの男は・・・それにこの力・・・万能じゃないのか・・・？）」

ゼロは先ほどのイレギュラーについていろいろと考えていたが、あまりにも不明瞭なことが多いので、これ以上考えるのは無駄だと判断した。
それに可能性は低いがあの男が今頃ブリタニア軍にここの場所を教えているかもしれないので、早々にこの場を後にすることにした。

【特別派遣響導技術部・倉庫】

ゼロとの初対面（互いに顔は見ていないが）を終え、彼は「（面白いものを見つけたな）」と思いながら上機嫌で特派に戻ると、なにやらロイドも機嫌がよく、はしゃいでいた。

「あっ、お帰りレイ君」

最初に彼に気づいたセシルが笑いかけながら言った。

「あぁ～、お～か～え～りぃ～！」

ロイドもセシルのおかげで気づいたようで、大手を振っていつもの調子で彼を迎え入れた。

「ただいま♪」

レイもニコニコしながら2人と挨拶を交わす。

「どうしたんだいロイドちゃん？やけに機嫌がいいね？」

だいたいの見当はついていたが、一応レイはロイドにきいてみた。

「ニュース見てないのかい？誘拐されていた僕のパーツが戻ってきて、無罪放免になりそうなんだぁ～！」

そういってロイドは倉庫内をスキップし始めた。
それをレイは「あはは～・・・」といった感じで見ているのであった。

「ところであなたは今まで何をしていたの？」

セシルはふとレイにきく。

「う～ん・・・ゼロとちょっとしたスキンシップ？」

「へぇ～、そうな・・・ってえぇーっ！！」

思わずノリツッコミを披露する彼女。

「君、ゼロに会ったのかい？」

ロイドも興味深そうにきく。

「うん、見た目通り、相当ふざけた人だったよ・・・でも頭の回転は速いね」

「捕まえようとは思わなかったの？」

セシルが少し不満そうにきいた。

「捕まえる？無茶言わないでよ、僕はまだ正式な軍の人間じゃないし、あそこにはゼロの仲間も大勢いたし、連絡しようにも携帯ももってないからさ」

「そっ・・・そうね・・・・・」

セシルは納得したが、彼の本心は、面白そうだったからゼロを捕まえなかっただけで、あの場のテロリストを無力化するなんてことは彼にとっては容易いことだっただろう。

「まぁそんなのどーでもいいんだけどさぁ～、いい加減彼女を紹介したら？」

「そうですね」

「彼女？」

「この前言ってたでしょ？新人の研究員のこと」

何故かセシルは嬉しそうに言った。
そして彼はこの前、彼らと出会ったときにロイドが言っていたことを思い出した。

「フラー君！」

「はい」

ロイドが呼ぶと、奥から1人の女性が現れた。
背は低く、赤茶色のボブガットで微塵のやる気の感じられないオレンジ色の瞳の女性は、上は薄い紫のハイネックに白衣を羽織り、下は白のミニスカートに黒いブーツといった格好であった。

「彼女は、この特派に新任で入った研究員で、フラー・ブレインハイム君」

「今日からあなたの飼育係をする羽目、兼、人間性に関しては全く無能な上司の部下になってしまったフラーです、よろしく」

「・・・飼育」

「無能って・・・」

おもわずレイとロイドが顔をしかめるが、彼女はそれを気にする様子もなく、レイに握手を求める。
一応彼はその握手に応えるのだが、その後、フラーがこっそり手を白衣の後ろで何度も拭っていたことに気づいたのであった。

ＳＴＡＧＥ　０３　【レイの興味】（後書き）

なんか原作沿いすぎつまんないですね…ｏｒｚ

なるべく原作のシーンは飛ばしてはいるんですけど。

今のところマオの辺りまで原作っぽくなっちゃいそうですね（汗）

そして今回はオリキャラ登場です！ｗ

一回キャラ紹介とかってした方がいいんですかね？

そーいえばなんとこんな駄作の小説に感想を書いてくださった読者様がいらっしゃったんですよっ！！ｗ

嬉しくて「ぐへへ～」って感じですｗ

とゆーことで良彦様、感想ありがとうございましたｗ

そーですよね、「ＮＭＦ」って…うっかりしてました。

「ＫＭＦ（騎士たる馬）」ですもんねｗ

とゆーことでたぶん全て修正させていただきました。

これからも応援よろしくお願いします。

そして次回をお楽しみに！w

ＳＴＡＧＥ　０４　【過去と未来】（前書き）

＊誤字・脱字の指摘お願いします＊

STAGE　04　【過去と未来】

【トウキョウ租界・ショッピングモール】

ジルは1人歩いていた。
というのも、なにやらクロヴィス殿下が亡くなったとかで、午後の授業が中止となり、その暇を生かしてミレイが彼女に「部屋は決まったけど、まだ服とか小物とか日用品がないでしょ？これで好きな物を買ってくればいいわ」とたくさんのお金をくれたのだ。
本当はだれかについてきてもらおうと思ったのだが、シャーリーは水泳部で、ニーナはなにやら研究中。
ミレイは生徒会の仕事があり、ルルーシュは出かけている。
この前知り合ったカレンは病気で休んでるし、リヴァルは・・・なんとなく除外。
と言った具合で都合が合わなかったのだ。
まぁなんとかなるだろうと思い、一日中租界内をぶらぶら歩きながら必要最低限の服と、その他諸々≪もろもろ≫の美知用品を買い終わる頃には、午後の5時をまわっていた。
そしていろいろまわって疲れたジルは、公園のベンチで一休みしていた。
ちなみに今の彼女の服装は、ミレイが用意してくれたアシュフォー

ドの制服である。
長い銀の髪を後ろで1つにし、ラメの入った金色のシュシュでそれをまとめている。
そんな彼女の座っているベンチの両側には必要最低限の日用品とはいえ、大量の荷物が置かれている。
しばらくそのベンチでぼーっとしていると、ある意味、お約束である数人の不良たちが近づいてきた。

「ねぇねぇ君〜、今から俺たちと遊びにいかねぇ？」

その中で、いかにも「ボス」といった感じの筋肉隆々でスキンヘッドの男がニヤニヤしながら話しかけてきた。
めんどくさいので無視していると「おい！きいてんのか！！」と男が怒る。
ジルはため息を1つ吐くと、その男にこやかな笑顔をむけて言い放った。

「死にたいんですか？」

「「「「「「・・・はい？」」」」」」

男たちの声が揃ってきき返した。
彼女は有無を言わせぬ雰囲気を出しながら立ち上がり、笑顔を彼らに向け続ける。

「なっ・・・！ふざけんなよっ！？いいからこ・・・ぐわっ！？」

男はジルの腕を掴んで引っ張っていこうとしたが、その手はすぐに払われ、顔面に回し蹴りを食らった。
それを受けた彼は軽く５ｍは吹っ飛び、ノックアウトした。

「「「「・・・・・しっ、失礼しましたっ！！！！！」」」」

残った男たちはしばらく唖然としたのち、ノックアウトした男を抱えてそそくさと逃げて行った。
ジルは再びため息を吐くと、ベンチに腰掛けた。
そして自分の手を見つめながら、最近起こったある出来事を思い出していた。
それは夕食を作るルルーシュの手伝いのために、野菜を切っていた時の話だ。
彼女は手が滑り、誤ってざっくりと人差し指を深く切ってしまった。
しかし驚くことにその傷は一瞬で治ってしまったのだ。
ルルーシュやミレイなどにそんなことも言えず、それが普通ではないことはわかっていたので、自分が恐ろしくなった。
それにこの年頃の少女としては異常な身体能力・・・

「はぁ～・・・」

本日３度目のため息を吐いた彼女は学園に帰ろうと立ち上がり、ふ

と思った。

「・・・・・・・・・・どっちだっけ？」

人気のない路地を、拘束服を着た女性が、若葉色の髪を靡≪なび≫かせながら歩いていた。
見た目は見目麗しい少女だが、どこか妖艶で、老成した雰囲気が漂っている。
そして彼女がその路地を抜け、目の前の公園をつっきって目的地に向かっていると、顔を伏せてベンチに座っている銀髪の女子学生が目に入った。
見たことのある顔に、思わず彼女は立ちどまった。

「まさか・・・あれは・・・・」

彼女はそう呟くと、つかつかと歩み寄り「おい、お前！」といきなり声をかける。

「・・・あなたは？」

女子学生は顔を上げ、何やら怪しげなものでも見るような目つきで首を傾げる。

「私はC．Cだ」

「C．C？イニシャルだけ？」

「さあな・・お前の名前は？」

「・・・ジルだけど・・・・・あなたは私が誰か知ってるの？」

ジルの目が一瞬で何かを期待したよな目に変わった。

「まぁ・・ある意味仲間だ」

「仲間・・・？友達ですか？」

「いや、それは違うが・・・まさかお前記憶がないのか？」

「えぇ・・・だからあなたが私について何か知っているのなら、どうか教えてくれませんか！？」

ジルはC．Cの手を握り懇願する。
その顔は必死だ。
その様子にC．Cの心の中には知っているが故の苦渋が広がっていた。

「・・・・・・本当にいいのか？それがどんな結果だろうと・・・」

C．Cはジルを見つめているが、その瞳からは感情は読みとれない。
それを見たジルは一瞬ひるんだが、「かまいません」と力強く応えた。

「・・・そうか・・だがまずは奴のところにいかなくてはな」

「奴？」

ジルは目を細めてC．Cにきく。

「ああ・・・ところで、お前はなんでこんなところにいたんだ？」

ふと疑問に思ったC．Cはジルにきき返す。

「えっ！？あっ、えっと・・それは・・・・・」

「・・・・・まさか帰れなくなったのか？」

「・・・・・・・・・」

ジルは無言でうつむいている。
どうやら図星のようだ。
C．Cは呆れたようにため息を吐いた。

「私もどうやらそこに用があるから一緒に行くぞ」

そう言って彼女はスタスタと歩き始めた。

「えっ！ちょっ！待ってよっ！」

ジルは両側にあった大量の荷物をひっつかむと急いで彼女の後を追いかけた。

その夜―…

ルルーシュは仮面を被り、ゼロとなり、護送されていた無実の親友、
枢木スザクを救出した。
そして彼を仲間に勧誘したが、上手くいかず失敗し、少し落ち込み、
うつむきながらクラブハウスへと帰宅した。

「ただいま・・・」

「おかえり、ルルーシュ」

「なっ!!」

「おかえりなさい、お兄様」

「その様子だと、食事は外で済ませてきたな」

帰宅したルルーシュは目の前の光景に一瞬で疲れが吹き飛び、驚きのあまり思考が停止した。
というのも、シンジュクで自分を庇って額を撃ち抜かれ、確かに死んだはずの女がナナリーと一緒に折り紙をしているのだ。
ルルーシュはその場にいたジルに「なんなんだこれはっ！？」といったような目を向けたが、彼女は首をすくめるだけだった。

「・・・・・・ジル・・頼むから俺にわかりやすくこの状況を教えてくれ・・・」

「彼女はC．C、今日、私が迷子になったところを助けてくれた人・・それにあなたに用事があるみたい」

「ふふっ、変わったお友達ですのね？イニシャルだけだなんて」

ナナリーは楽しそうに笑い、ジルは何故か気難しそうな顔をし、C．Cは黙々と折り紙を折り続ける・・・
これは何かの嫌がらせなのか？と思わずにはいられないルルーシュ。
このカオスな状況に頭が全く機能しない。

「ひょっとして、お兄様の恋人？」

「えっ・・・？」

そんな中ナナリーがルルーシュのある意味ピンチな状況を知ってか知らずか、無邪気に彼にきいた。
しかもC．Cが火に油を注ぐように、とんでもないことを口にした。

「将来を約束した関係だ・・・なっ？」

「はっ？」

C．Cの言っているいみがよくわからないルルーシュ。
そして何故かジルがニヤリとする。

「将来って・・結婚？」

「ちっ！違うっ！違うって・・そういうのじゃなくて・・・だから、その・・彼女は冗談が「嫌いだ」」

「おめでとうルルーシュ、式には呼んで頂戴ね？」

「なっ！？」

ナナリーの誤解を解こうと必死になるルルーシュをC．Cはあっさりと蹴落とす。
さらにはジルまでが彼の敵となってしまった。

「そうですか・・お兄様が・・・意外と早いんですね・・・・・」

「そうよナナリー、どうやら『お兄様』は彼女とベットの上で朝まで更なる愛を育みたいと仰≪おっしゃ≫っていますから、健全な私たちはお二人の邪魔にならないようにお暇≪いとま≫しましょうね？」

「・・・・・・・はい」

とてつもなく悲しそうなナナリーの車椅子を押してニヤニヤしながら部屋から出て行こうとするジル。

「なっ！？待て！！間違っているっ！！いろいろ間違っているぞっ！！ジルっ！！」

ルルーシュは「冗談じゃない！」といった顔でジルを必死に止める。
すると真顔に戻った彼女は彼の耳元でささやく。

「わかってるわ・・彼女はあなたに会いたがっていた私の友達とでも言っておく・・・それに彼女、どうやら私のこと知ってるらしいの・・・だからナナリーを寝かせたら私も行くから、あなたはC・Cと自分の部屋に・・・」

そう言い終えると、彼女はナナリーとリビングを出て行った。

「くっ!!とにかく来いっ!!」

2人が出て行った後、ルルーシュはC・Cの腕をひっつかみ、自分の部屋へとひっぱっていった。
そして彼はC・Cを半ば投げ捨てるようにベッドに座らせた。

「だれだお前は?」

「言ってただろ?C・Cと」

「そうじゃなくて、お前は「死んだはず、か?」」

ルルーシュが一番気になる点はそこだった。
あの日、確かに彼女は自分を庇って死んだ。
しかも額を打ち抜かれたのだ。

普通なら生きているはずなどない。
だがC．Cはそんな彼などつゆ知らず、話を続けた。

「気に入ったか？私の与えた力は」

「やはり・・・お前が・・・」

「不満か？」

「いや、感謝してるよ・・俺のスケジュールを大幅に前倒ししてくれたんだから・・・」

「スケジュール？」

「ブリタニアをぶっ壊す予定表さ・・・動きだせるのはもう少し先になると思っていた」

「壊せると思うのか？その力だけで」

「これがなくとも・・やるつもりだった」

「見込み通り、面白い男のようだ」

「お前、これからどうする？軍に追われているんだろ？」

「軍と言ってもごく一部、なら普通に隠れているだけで問題はない・・・ここで我慢してやるよ」

そういってC．Cは着ていた拘束服を次々と脱ぎ捨て、ベットに潜ってしまった。

「なっ！？ここに泊まるつもりかっ！？」

「男は床で寝ろ」

「そういうことじゃなく・・・」

「私が捕まったら、お前も困るだろ？じゃあお休みルルーシュ」

「待てっ！！まだ話は終わって「そうですよ」」

突然ルルーシュの言葉を遮ってジルが部屋に入ってきた。

彼女の右手にはナイフが握られていた。

「ジル！？」

まさかナイフを持ってくるとは思わなかったルルーシュは焦った。
だがC．Cは全く動じた様子はない。

「私にそんなもの「わかっています」」

ジルはC．Cの言葉も遮った。

「でも痛みは感じるでしょ？こう見えて拷問の知識は豊富なんですよ？」

「なっ！？ジル、そんな知識どこでっ・・・？」

「それを今から彼女にきくんです」

ジルは冷たい目でC．Cを見下ろす。
それをみたC．Cは仕方ない、といった表情で、１つため息を吐くと、改めてベットに座りなおした。
ルルーシュはその様子を腕組みをしながら壁にもたれて冷や汗をか

いて見ていた。

「・・・私は一体何ですか？」

ジルがきく。

「私も詳しくはわからないが・・・一度、クロヴィスの研究所で捕まっていた時にお前を見たことがある」

「研究所だと？」

C．Cの思いがけない答えに、ルルーシュが眉を寄せて言った。

「あぁ・・・おそらくなんかの実験体だったんだろう・・・お前も心当たりがあるだろ？」

C．Cはジルを見ながらきく。
確かに心当たりはいくつもあった。
常人よりも傷の再生スピードが速く、身体能力も女の身体だというのに体力、筋力、瞬発力もはるかに凌≪しの≫ぐものがある。
それに記憶はないというのに暗殺術やＫＭＦの操縦方法、拷問術、戦闘指揮に関する知識など、まるで戦うために作られたマシーンとでもいえるほどのものを有しているのだ。

「そん・・な・・・・・私・・・・」

C．Cから自分の正体を聞いたジル。
彼女はあまりのショックのあまりナイフを落とし、その場にへなへなと座り込んでしまった。
そしてその目からは涙が溢れていた。

「ジル・・・・」

ルルーシュはそんな痛々しい彼女をただ見ていることしかできなかった。
C．Cも無表情ではあるが、顔を背けている。

「私は・・・どうして・・・うぅ・・・・・・」

自分という存在がわからない。
何のために生きているのだろうか？
記憶もなく親すら覚えておらず、今まで自分が生きていた幸せすら感じられない。
ただ他者を殺すために生み出された自分。
はたして生きている意味などあるのだろうか？
この世界で独りぼっちの気がした。

いや、きっと独りぼっちなのだろう。
目の前が真っ暗で、何も見えない・・・
絶望だけが彼女を支配し、押しつぶす。
そのとき、先ほどまで持っていた自分のナイフが目に入る。
すると彼女はそのナイフをひっつかみ、自分の胸に向けて大きく振りかぶった。

「ジルっ！！やめろっ！！」

それを見ていたルルーシュは慌てて彼女の腕をつかみ、無理やり持っていたナイフを奪い取った。

「なんで止めるのよっ！！放っておいてっ！！！どうせ私はっ！！私はっ・・・！！」

「君は独りじゃないっ！！」

「！？」

ルルーシュはジルの両肩をつかみ、まっすぐ彼女を見据える。
ジルも思わず涙でぐしゃぐしゃになった顔を上げて、彼を見る。

「君は独りじゃない！俺も！ナナリーも！会長も！シャーリーも！リヴァルも！ニーナも！カレンも君の味方だっ！」

ルルーシュの目は真剣だった。
そこで彼女は悟った。
彼も自分と同じだったのだろうと・・・

「・・・・・私は・・自分の正体がなんであれ、覚悟はしていたつもりだった・・・だけど実際に向き合ってみると、そう簡単に『はい、そうですか』なんていかないのね・・・・・・」

「それは人間として当たり前だ・・むしろそう感じない人間の方がおかしい・・誰も君を責めたりなんてしないさ・・・・・悪いのは君じゃない！ブリタニアだっ！！」

「ブリタニア」という単語を口にしたルルーシュは、どこか憎々しげだった。

「・・・俺も昔は君と似たようなものだった・・・全てに絶望していた・・・・・」

ルルーシュはジルから離れ、背を向けて自分の生い立ちについて語りだした。

「俺は元ブリタニアの皇子なんだ・・・」

「皇子・・って・・・」

「あぁ・・7年前、俺の母親はテロリストの仕業に見せかけて殺されたんだっ・・・！」

彼は拳を強く握り締めていた。

「母の身分は騎士公だったが、出は庶民だった・・・他の皇女たちにはさぞ目障りだったんだろう・・・そして母は殺され、ナナリーは足と視力を失ったっ・・・！それなのに、あの男・・・ブリタニア皇帝は母の葬儀やナナリーの元にも顔を出さず、あまつさえ、当時、敵対していた日本に俺たちを人質として送ったっ！！」

ルルーシュの目は怒りと憎しみに燃えている。
そしてジルはそんな彼の話を無言で聞いていた。

「だがそんな日本でも俺たち兄妹にとっていいこともあった・・今まで召使いや義兄弟に囲まれて育った俺に、初めて友達ができた・・・俺とナナリーはそいつと3人でささやかだが幸せな時間を過ごしていた・・・だがブリタニアはっ・・・！！」

「日本に侵略戦争を仕掛けた・・・」

怒りに顔を歪めたルルーシュの言葉を、今まで傍観していたC．Cが引き継いだ。

「・・・そうだ・・だから俺はその時悟ったんだ！ブリタニアがあっては、俺もナナリーも幸せにはなれないとっ・・・！だから俺は決意した！ブリタニアをぶっ壊すとっ！！」

彼は目の前にあったチェス盤の上にあった駒を怒りにまかせて手で薙ぎ払った。
そしてしばらく沈黙が続き、冷静になったルルーシュが口を開いた。

「・・・ジル・・・・・俺と一緒に来ないか？」

「えっ？」

ジルは突然の彼の言葉に驚いた。

「俺と一緒にブリタニアをぶっ壊さないか？」

ルルーシュはゆっくり、そしてはっきりとした口調で彼女にきいた。

「俺たち兄妹も、君も、このブリタニアという国に人生を狂わされた被害者だ・・・君には権利がある・・戦う理由も今できただろ？」

「・・・あなたにそれができるの？」

「できるっ！！いや！！成さなくてはいけないんだっ！！せめてナナリーだけでも幸せに暮らせる世の中を創るためにはっ！！」

彼の目は真剣だった。
普通に考えたら無謀な話だろう。
相手は世界の3分の1を占める超大国。
それをたかが現状、2人の人間が覆そうだなんて・・・
ジルにはどこからそんな根拠が湧いてくるのかわからなかったが、
彼なら成し遂げる気がした

「それに、俺は力を手に入れた・・・」

「力？」

ルルーシュはニヤリと悪魔のような笑みを浮かべ、それを見た彼女は背筋がゾクッとするのを感じた。

「あぁ・・・そこのC．Cのおかげだな・・・・・」

ジルがC．Cを見ると、彼女はつまらなさそうに自分の髪の毛をいじっていた。

「今その力を君に教えることはできないが、もし俺についてきてくれるなら、必ず君の望んだ未来を見せよう！！」

「未来・・・」

ジルはその言葉に心惹かれた。
自分が今一番欲しているもの―…
そして望んではいけないもの―…
だけど彼は宣言したんのだ。
“未来を見せよう”と・・・
なら、自分が成すことは1つ。
そして彼女は決意した。

「・・・いいわ・・ルルーシュ、私はあなたの騎士となりましょう・・・・あなたやナナリー・・自分の未来のために・・・」

「ありがとう・・ジル・・・」

感謝の言葉を述べたルルーシュは彼女に優しく笑いかけた。

「っ！！／／／／／」

するとなぜかジルの顔が真っ赤になり、彼に背を向けてその顔を隠した。

「じゃ！じゃあ私はもう寝るわね！？泣いたら疲れちゃって・・・」

そう言ってジルはそそくさとその部屋から出て行ってしまった。

「・・・良かったのか？あんなにベラベラ話して・・」

彼女が出て行き、２人っきりになった部屋でＣ．Ｃがルルーシュにきいた。

「・・・彼女があまりに不憫でな・・・・・・まさかブリタニアの実験体≪モルモット≫だったとはな・・・」

彼は苦々しい顔で答える。

腹違いとはいえ、自分の兄弟がやったことなのだ。
ルルーシュも彼なりに責任を感じていた。
だがそれもクロヴィスを殺した自分への言い訳の1つでしかないな、
とルルーシュは半ば自嘲的に笑った。

「・・・そうか・・まぁ私も気になることはあるしな・・・」

「・・そう言えばC．C・・最後に1つきいていいか？」

「なんだ？」

C．Cは眉をひそめて彼にきき返す。

「この力・・通用しない相手もいるのか？」

「・・・お前の場合は1度使った人間・・そして私だな・・だがどうしてだ？」

「今日ゲットーで、この力を使ったが効かない人間がいた・・・」

「なら一度使った人間じゃないのか？」

「そうならいいんだが・・・そもそもまだこの力を手に入れて日は浅い・・実験のために何度か使ったことはあるが、彼らはゲットーで会う可能性はあまりに低い人間ばかりだ」

「・・・それは私にもわからないな・・・じゃあ私は寝るぞ、疲れた」

そう言って彼女は再びベットに潜りこむと、そのまま眠りについた。ルルーシュは今日起こった出来事をいろいろと考え、頭の中で整理をつけていたが、あまりにも情報が少なすぎるので考えをまとめられずにいた。
そして彼はそのうちに深い眠りに落ちていた。

ＳＴＡＧＥ　０４　【過去と未来】（後書き）

はい、今回はジルのちょっとした過去のお話ですねｗ
そして今までよりちょっぴり長いですね。
そして自分の文才のなさに改めて乙ですｏｒｚ
でもこんな駄文でも読んでくださる方がいるのならっ！！
と思いつつ書いておりました。
もし何か譜に落ちない点などがありましたら、ご質問いただければ答えられる範囲で答えさえていただきます。
まぁなんせご都合主義ですからそういう点は多々あるでしょう…ｗ
そしていい加減キャラ紹介を書かなくちゃなぁ、と思いつつ、なかなかキャラがまだあまり定まっていませんね…（汗）
できれば次回にはできるのように頑張りますｗ
ではまたノシ

STAGE　XX　【キャラクタープロフィール】（前書き）

一応まだオリキャラは出すつもりなんで、その都度更新していきます！

まだ明かせない設定とかも、後々掲載する予定ですｗ

STAGE　XX　【キャラクタープロフィール】

ジル・フランゾワース（♀）（推定１７歳）

銀髪のまっすぐなロングヘアーでアメジスト色の瞳をした色白の美少女。
カプセル強奪事件の際に、クロヴィスの秘密研究所から逃げ出す。
ほぼ不死であり、驚異的な治癒能力と、身体能力を有する。
気分で髪の毛を１つに結ぶこともある。
金色のラメの入ったシュシュがお気に入りで、右腕に常時はめており、愛用している。
自信の記憶を探しながら、ルルーシュを信じて自らの未来のために彼の騎士となることを決意する。
脱ぎ上戸で、よくルルーシュに注意されている。
武器はサーベルと自作したマグナムを愛用。
体術と剣術が得意。
科学者としてもそこそこのスペックを持っており、ＫＭＦの改造なども行っている。
好物はドーナツ。

レイ・チェスター（♂）（推定１７歳）

銀髪でボサボサ頭のアメジスト色の瞳をした美少年。
カプセル強奪事件の際に、クロヴィスの秘密研究所から逃げ出す。

ほぼ不死であり、驚異的な治癒能力と、身体能力を有する。
モットーは「己の欲には忠実に」であり、とてつもない野心家。
自身の記憶に関しては全く興味がない。
お調子者であるが、目的のためには手段は選ばない結果主義者。
ブリタニアへの忠義は皆無。
大の戦闘マニアでもあり、狙撃や早打ちなど銃の扱いは超一流。
右の足首にコンバットナイフを仕込んでいる。
好きなものはナイトメア。
苦手なものはフラー。

フラー・ブレインハイム（♀）（２１歳）

背は低く、赤茶色のボブガットで微塵のやる気の感じられないオレンジ色の瞳の女性。
主にナイトメアより、それに搭載する武器に関しての若きスペシャリスト。
毒舌であり、本人は病気のせいだと言っているが、事実かどうかは不明。
優秀な科学者ではあるが科学が嫌いで、ＫＭＦの開発も嫌々している。
だが家が貧しいため給料がいいこの仕事をして仕送りをしている。
完璧主義者でもある。
嫌いなものは科学。

STAGE　05　【騎士が仮面に捧ぐ】（前書き）

＊誤字・脱字の指摘おねがいします＊

STAGE　05　【騎士が仮面に捧ぐ】

【トウキョウ租界・軍事裁判所】

「枢木スザク一等兵、第十一方面軍行き重要１０７５、クロヴィス殿下殺害容疑については、証拠不十分のにつき、釈放とする」

裁判の結果、無罪放免となった彼は、久々に自由になった。
ゼロの件に関しては何度もしつこく尋問されたのだが、軍事裁判はあっさりと終わった。
そのあまりのあっけなさに「どうして・・いきなり・・・」と思わず彼は呟いてしまう。
あまりに早く終わってしまったので、迎えに来てくれるはずのロイド達の姿はまだなかった。
仕方ないのでしばらくそこら辺でぶらぶらスザクに、思わぬハプニングが襲った。

「どいてくださぁーいっ！！あぶなぁーいっ！！」

スザクは驚いて声のする方・・・つまり上を見た。
すると一人の綺麗なピンク色をした髪の女性が、上から落ちてくるではないか。
彼はその光景に驚いたが、女性を見事お姫様だっこでキャッチした。
こうしてスザクとユーフェミアのイチャイチャ（？）Ｔｏｄａｙが幕を開けるのであった。

一方その頃―…

レイはいつものように特派へと顔を出したのだが、ロイドとセシルは枢木スザクを迎えに行くということなので、休みとなった。

「・・・・・・・・・・・・」

そんな彼はロイドに自宅として与えられたマンションの一室の玄関に立ち尽くしていた。
というのも、なぜかリビングまで続く廊下に、ずらりと段ボールの山が大量に積まれているのだ。

「あぁ、おかえりなさい」

立ち尽くす彼にリビングから顔を出した新任の研究員、フラー・ブレインハイムが声をかけた。

「・・・これはなに？」

レイはリビングに足を進めながら彼女にきいた。

「聞いてませんか？主任があなたとここに住むようにと、ふざけたことをぬかしていたんですが」

「なんでっ！？」

「2人分の家賃を出せるほど特派の予算に余裕がないとのことです」

「じゃあフラーちゃんが別の場所に自分で家賃払って住めばいいでしょ？」

「却下です、私も無駄遣いはしたくありませんし、文句があるならあの人間破綻者≪ロイド≫に言ってください、あれのランスロットに予算を使いすぎてるせいなんですから・・・それか何か問題でも？」

「いや、いくらなんでも男女2人で1つ屋根の下ってのは・・・」

それをきいたフラーは、なぜか段ボールを開けていた手を止めた。そして彼をじーっと見つめ、「そうですね・・あなた顔の作りはいいですし・・・」と呟いて無表情で舌舐めずりをしたのを、彼は見なかったことにした。
レイは初めてフラーを見たときもそう思ったのだが、つくづく彼女のことは苦手だ。
彼がそんなことを思っていると、彼女は唐突に話を切り出した。

「そういえば、あなたでしたよね？私のナイトメアに乗るのは・・・」

「ナイトメアっ！？」

その単語を聞いたレイは目を輝かせる。

「あっ、はい・・・それでその最終的な調節が必要ですから、後でデータを取らせてください」

「もっちろん♪」

あまりにウキウキしているレイを見たジルは地味に引いた。
まぁ正直、研究やＫＭＦなんてどうでもいいが、彼女はやるからには徹底的にやる完璧主義者なのだ。
あのＫＭＦが彼によって完成するのなら・・・
そう思ったフラーはため息を１つ吐いて、段ボールの選別を再び始めた。

【アシュフォード学園】

ルルーシュは学園内の中庭にあるベンチに腰掛けてパソコンを開いていた。
彼は先日、自分が助けた親友、枢木スザクのその後の処分について調べていた。
しかしまだこれといった情報はなく、おそらく自分が真犯人だと名乗り出たことで、無罪になるだろうとは思っているが、それでも心配であった。

「ルルーシュ君・・・今いい？」

そしてそんな彼に、一人の女性が遠慮がちに声をかけてきた。
彼女の名前はカレン・シュッタトフェルト。
表向きはお淑やかで病弱なお嬢様だが、裏ではレジスタンスで“紅月カレン”としてテロ活動を行っている。
彼女とはシンジュクで巻き込まれた際に目撃しており、ルルーシュ自身も正体がばれそうになったが、何とか誤魔化して今に至る。

「んっ？なに？」

「この前の電話のことなんだけど・・・」

「電話？」

「その・・ほら、バスルームで・・・着信履歴ってわからない？ちょっと連絡を取りたくて・・・」

「学校のだからな・・・俺の方では・・・っ！？」

ルルーシュはカレンとやり取りをしながらパソコンを閉じ、ふと顔を上げると、なんとカレンの背後で呑気にくるくると回っているC.Cがいた。

「（あの女っ・・・！！）」

彼はあまりに軽率な彼女の行動に怒り、おもわず膝の上の拳に力が入る。

「んっ？なに？どうかした・・のうぇ！」

そんなルルーシュの様子に気づいた彼女は後ろで何があるのかと思い、振り返ろうとすると、彼は彼女の顔を無理やりこっちに向けた。そして背後のC．Cは連れ戻しに来たジルによって引きずられて回収された。

「ねぇ・・・」

「ん？」

「これは何？」

「あぁ、なんなんだろうな・・・」

こうしてルルーシュはカレンへの言い訳を必死で考え、さらにはなぜか悶々として不機嫌なシャーリーをなだめる羽目になったのであった。

「馬鹿かお前は！ふらふら出歩くな！」

「いいだろう？学校の中くらい・・堅いこと言うな」

中庭でC．Cを見たルルーシュは怒った様子でジルの部屋に来て、C．Cと言い争っていた。
なぜルルーシュがC．Cがジルの部屋にいるかわかったのかと言うと、C．Cを回収したジルが、彼の携帯に連絡を入れたのだ。
そんな彼女の部屋はとても殺風景であり、机と椅子とベットがそれぞれ1つずつと、クローゼットしかない。
そしてその中の机の上でたくさんの工具を広げて、なにやら黙々と作業をしていた。

「全く・・ジル、こいつの監視を頼んだだろ・・・」

「えーと・・・少し目を離した隙に・・・」

ため息をついて頭を押さえるルルーシュに、ジルは大変だなぁと思いながら苦笑いして言った。

「ところで、お前は何をやっているんだ?」

そしてC．Cはまるで何事もなかったかのような態度でジルの後ろから机を覗き込むようにきいた。

「これ?まぁ平たく言えば、新型の銃かな?」

「銃？」

それを聞いたルルーシュも額に皺を寄せながらも、興味深そうにきき返す。

「一般的な銃って、リニアモーターで加速して弾丸を射出するでしょ？でもこの銃は弾丸の後ろに取り付けたサクラダイトを起爆させて弾丸を発射するの」

「お前そんなことができるのか！？」

ルルーシュは驚いた。
確かに自身も銃火器に対しての知識はあるが、流石にそれを作るまでの技量はない。
それが彼女にあるとしたなら、きっとそれは・・・

「えぇ・・・私の知識の一部みたいね・・ナイトメアも一から作るのはちょっと厳しいけど、改良するくらいの知識は持ち合わせているわ」

そんなかことを淡々と語るジルの顔は、やはりどこが悲しそうだった。
そしてC．Cは話を反らすようにふと疑問を口にする。

「だが、その銃と今までの銃の何が違うんだ？弾を撃つことには変わりないだろ？」

「コイルガンってのはそもそも、弾の速度が遅いのよ・・レールガンなら理論上は光速に近いスピードで射出できるけど、どうしても大型になって持ち運びは不可能だし・・・でもこの銃ならそこそこの射出速度を得ることができるわ」

「じゃあわざわざサクラダイトなんて使わなくても、火薬で良かったんじゃないのか？」

C．Cの心配り・・・かどうかは不明だが、話題が変わったことにほっとしたルルーシュが、これ幸いとばかりに続けてジルにきく。

「いいえ、火薬だと熱にほとんどのエネルギーを使ってしまうから、威力が落ちるの・・その点サクラダイトはほぼ爆発にエネルギーを費やせるから・・でもそれに耐えられる構造と素材がなかなか難しくてね・・まだ試作品の段階」

そう一通り説明を終えたジルは、椅子の背もたれで大きく背伸びをした。
ルルーシュは額に寄せた皺をさらに寄せた。
なぜ彼女はそんな物騒な物を作っているのか。
疑問に思った彼はジルに問う。

「でもなんでそんなものを？」

「私はあなたの・・ゼロの騎士になるといったでしょ？」

そう言いながら彼女は机の横に立て掛けてあったサーベルに手を伸ばし、それを鞘から抜いた。

「・・・そうだったな」

全く持って矛盾している。
自分から巻き込んでおいて、彼女を心配するなど・・・
そんな風に思ったルルーシュは自嘲気味に笑った。
するとそんな中、ピンポーンとインターホンが鳴った。

「おっ、私のピザだ」

「「（またか・・・）」」

そそくさとピザを玄関に取りに行くC．Cを見ながら、そう思う2人であった。

【特別派遣響導技術部】

「わぉ・・・・」

「これが、私の作った第7世代型ＫＭＦ、ベティヴィアです」

特派に戻ったレイは、目の前にある機体に目を輝かせていた。
見た目はほぼランスロットと同じだが、機体色はダークグレイで、
少しばかりランスロットより重厚な作りになっている。

「機体はほぼランスロットを流用していますが、武装はまるで違い
ます・・これは狙撃に特化したＫＭＦです」

「狙撃？」

「はい・・他にも試作機はありましたが、あなたのシュミレーションの結果をみると、命中率だけはズバ抜けて優秀ですので・・この機体との相性もいいと思いまして」

「へぇ～♪」

彼はフラーが手渡したマニュアルを楽しそうにペラペラと捲≪めく≫っている。
その様子を見ていたフラーは目の前のパソコンにデータを入力しながら、ふと疑問に思った。
ロイドやセシルから聞いた話では、彼は全く過去の記憶がない。
常人・・・いや、自分のような異質な人間でさえ、もし記憶がなかったらと考えると、多少なりとも気分は暗くなるものだろう。
彼はそれを隠しているとするのなら、それはそれで大した役者ではあるが、彼女には微塵もそんな様子は感じられなかった。
どうして彼は自分という存在がこんなにも曖昧なものとなっているのに、平気なのだろうか？
もはやそれは彼女から言わせれば異常としかいいようがない。
だがそんな彼だからこそ、彼女は何故か魅かれるものを感じた。
それは愛でもなく友情などという大凡≪おおそよ≫自分に持ち合わせ得ないくだらない感情などではないが、確かに心の内にはあった。

「（・・・理解不能ですね）」

そう思ったフラーは無表情でレイを見た。
彼はすでに意気揚々とシュミレーターに乗り込んでおり、後は彼女がプログラムを起動させるだけだった。
そうだ、科学者に感情など必要ない。
そんなものをまともに持ち合わせていたらやっていけるものではない。
自分たちは人殺しの道具を作っているのだ。
だから自分は科学が嫌いなのだが・・・
フラーはそうして邪念を払いのけると、シュミレーターの起動スイッチを押した。

【アシュフォード学園・ジルの部屋】

「・・・・・・・・・ふぅ・・・・」

C．Cの脱走事件後、ジルは自室で黙々と作業を続け、気がつけば窓の外で日は傾いており、空はすでにオレンジ色に染まっていた。彼女は綺麗だなと思いながら椅子から立ち上がりそれを見ていると、誰かが扉をノックした。

「ルルーシュだ、今いいか？」

「えぇ・・どうぞ」

「入る・・・ぞっ！？」

部屋に入ったルルーシュは目の前の光景に唖然して、顔を真っ赤にした。
そこには髪を1つに結び、下着姿で彼に背を向けて立っているジルがいたのだ。
そしてそんな彼女の足元の床には、汚れた作業着が脱ぎ捨ててあった。
そしてそんなルルーシュをお構いなしに彼女が振り返ると、彼は慌てて顔を背けた。

「なっ！ジル！なんでそんな格好でっ！？」

「えっ？あぁ・・・服が汚れたから洗濯しようと思って・・・」

「じゃあ服を着ろ！というより着てから俺を部屋に入れろ！」

「はいはい・・・それで、なんの用なの？」

ジルはめんどくさそうにベットの上に脱ぎ捨ててあったバスローブを着ながらきいた。

「いや、君についていろ知りたくてな・・・」

「ふふっ・・意外に大胆ね？ちなみに私はたぶん“初めて”よ？」

「初め・・・ってそんなことをきいているんじゃないっ！！／／／／」

「あら残念」

最初はジルの言っている意味がわからなかったルルーシュだが、その意味を理解すると、再び顔を赤くした。
その様子を見た彼女は半ば予想通りの反応に思わず笑ってしまった。

「俺が言いたいのは君の知識に関してだ・・・そこの銃もそうだが、もしブリタニアの実験だとしたら、君に植え付けた物はそれだけじゃないはずだ」

「・・・そうね・・私が持っているのは、武術、剣術、暗殺術、戦闘の指揮、兵器、ＫＭＦの操縦と科学技術かしら？後は異常な身体能力と、傷の再生スピード？」

「傷の再生スピード？」

「ほら、こんな感じ」

そう言ってジルは机の上にあったカッターで自分の腕に切り傷をつける。
するとそれはみるみるうちに元通りに戻った。

「これは・・・・・あのＣ．Ｃもシンジュク事変の際に俺を庇って額を撃ち抜かれていたが、死んでいなかった・・・もしかしたらこれと関係あるのか？」

「わからないけど、私は不死ではないわよ？」

「どうしてわかる？」

「なんとなくそう感じるの・・・」

まるで遠くを見るように目を細めながらそう言った彼女に、ルルーシュは触れてしまえば壊れてしまいそうな危うさを感じた。
自分はナナリーの未来のために、彼女は自分の未来のために行動を起こした。
それが間違いだったとは思っていない。
自分たち兄妹には選択できる未来が限られている。
アシュフォードもいつまで後ろ盾となってくれるかわからない。
生きるためにはブリタニアという国は邪魔でしかない。
だが彼女は違う。
ミレイが彼女の身元について警察に届け出たが、軍は一向に彼女を連れ戻そうとはしない。
ということは自分がクロヴィスを殺したことにより、彼女についての実験は断念されたのだろう。
なら別に隠れて生きる必要はないのだ。
普通にこの学校で悠々と暮らせばいい。
彼女の能力ならブリタニア軍の中でもトップの方に行くこともできるだろう。
しかし彼女は自分とともにこの国に反逆することを決めた。
一体なぜなのか・・・？

「なあジル・・・どうして君は俺に力を貸してくれる気になったんだ？」

ルルーシュはどうしても気になり、口を開いた。

「・・・・・そうね・・強いて言うなら“生きてみたかった”かしら」

ジルはそう言ってウィンクをすると、それ以上は語ろうとはしなかった。

だがルルーシュにはその言葉の意味が何となく理解できた気がした。

【特別派遣響導技術部】

「ほら、彼が車で話したレイ・チェスター君」

「よろしく♪」

「こちらこそ」

純血派内のもめ事をを諌めたスザクは、特派でレイと初対面をし、固く握手を交わしていた。
ちなみにフラーは奥で先ほどシュミレーターでとったデータをもとに、ベティヴィアの最終調整をしている。

「本当よかったよ、君に1つ貸しを作ったまま死なれちゃ困るからね♪」

「貸し？」

レイが言ったことに全く心当たりがないスザクは、首をかしげている。

「君でしょ？ランスロットの適合率９４％って・・僕は９２％で２％君に負けててね・・だけど負けっぱなしは嫌いだからさ・・・？戦場では背中に気をつけた方がいいよ？」

そういってレイがニヤリと口元を歪め邪悪な笑みを浮かべる。
スザクはそれを見てゾクッと背筋に寒気が走るのを感じた。

「レイ君！」

「冗談、冗談！やるならちゃんと正面からやるって♪」

「そういう問題じゃないでしょ！？」

しかしいつものようにセシルが怒ると、彼はいつものようなおどけた優しい笑顔に戻る。

「（彼の素顔はいったいどっちなんだろうか・・・）」

スザクは心の中でそんなことを考えながらレイがセシルに鉄拳制裁を加える姿を見ていた。

ＳＴＡＧＥ　０５　【騎士が仮面に捧ぐ】（後書き）

やっとオリＫＭＦが出てきました！
活躍はもう少し後なんですけどね…ｗ
今回は二人の日常的な部分が書けたらいいなぁ～。
と思ったんですけど、レイとオレンジとの出会いとか、ジルとＣ・Ｃがルルーシュを尻に敷く話とか、まともに書いたら相当長くなりそうだったんで大幅にカットしました。
いつか閑話として皆様に提供できたなと思っておりますｗ
武器に関してはいろいろ調べて書いてはいるんですけど、どうしても辻褄が合わないところが出てきちゃうんですよね。
まぁもしそういうところを見つけても、目をつぶる方向でお願いしますｗ
でわノシ

STAGE ?? 【生徒会のクリスマス】（前書き）

みなさんメリークリスマス☆
完全なるお遊び投稿ですが、お楽しみいただければ幸いですw

STAGE ?? 【生徒会のクリスマス】

【アシュフォード生徒会室】

「会長・・・一体これは・・・？」

生徒会室に入ってきたルルーシュは目の前の光景に危機感を覚えた。
そこにはサンタの格好をした生徒会メンバーの女子がいたのだ。
シャーリーとミレイは楽しそうで、カレンとニーナは恥ずかしそうだ。
そしてその中で一番異質なのがジルだ。
彼女以外はみな、普通にミニスカートのサンタなのだが、彼女だけは胸だけが隠れており、腹部は露出し、ミニスカートが他よりさらに若干短い。
しかもその格好で足を組んで堂々と座っているため、中がチラリと見えている。
それが目に飛び込んできたルルーシュは慌てて目を反らし、顔を赤らめる。

「なっ！！ジル！！お前はまたそんな格好でっ！！／／／」

「本当はみんな同じサンタ服にするつもりだったんだけど、買いにいった時にこれを見つけてね？それで一着買ってきたんだけど、シャーリーとニーナとカレンは恥ずかしがっちゃって・・・」

「あっ・・・！当たり前ですよっ！！／／」

ミレイが残念そうに言うと、シャーリーが顔を赤面して言った。

「ジル、そんなの着てて恥ずかしくないの・・・？」

「えっ？何が？動きやすくていいと思うけど・・・」

カレンが疑問に思ってジルにきくと、彼女はキョトンとした顔で答える。

「そ・れ・でぇ～・・・ルルーシュはこれねっ？」

そう言ってニヤリとしたミレイによってルルーシュに手渡された物は、なぜかクリスマスツリーのコスプレだった。

「なんなんですかこれはっ！？」

「何って、クリスマスツリーよ？」

「そうじゃなくて！なんでツリーなんですかっ！？」

「いいじゃなぁ～い！バカっぽくて」

「なっ・・！馬鹿って・・！」

そんな横暴なミレイに、ルルーシュが言い返そうとすると、突然部屋の扉が開いた。

「おっ！やっとルルーシュも来たみたいだな」

「お兄様がいるのですか？だから先ほど部屋にいなかったんですね」

「全く・・せっかくのクリスマスなのにどこに行ったのかと思ったよ」

「あ～あ、僕もサンタがよかったなぁ～・・・」

「スカートでもよければいつでも私のと変えてやるぞ？」

入ってきたのはリヴァル、ナナリー、スザク、レイ、そしてC．C の5人で、リヴァルとスザクとレイはトナカイ、ナナリーとC．C はサンタの格好をしている。

「C．C！！なんでお前がここにいるっ！？」

「細かいことは気にするな、番外編でよくあるお決まりだ、文句があるなら今この後の展開に苦悩している作者に言え」

「・・・・・・・・」

無言な彼に、すいませんルルーシュさん・・・と思う作者。
そこは置いといて・・・

「とにかく！！俺はこんな物着ませんから！！」

「ダ～メ！！スザク君！！レイ！！ジル！！」

「「「イエス・ユア・マジェスティ！！！」」」

「おい！！間違ってる！！間違っているぞお前たち！！それは皇帝に対しての・・ってどわふっ！！」

ミレイの命令にきびきびと答えた3人は、ジルは背後から羽交い絞めにし、レイとスザクは暴れる彼の足を抑えつける。

「おっ！！おい！！ジル！！なにかあたってるぞっ！！／／」

背中に感じた柔らかい2つの感触に、ルルーシュは顔を再び真っ赤にする。
そしてそんな彼に更なる魔の手が忍び寄る・・・

「さぁ～、ルルちゃ～ん？お着替えの時間ですよぉ～？」

クリスマスツリーの衣装を手に持って、ニヤニヤ近づいてくるミレイ。
もはや成すすべなく冷や汗をかくルルーシュ・・・

「ちょっ！会長っ！！いっ、いやっ！！止めてくださいっ！！いやちょっ！！やめ・・・ナッ・・ナナリィィィィ――――――――ッッッッ！！！！！」

数分後―・・・

その場にいた全員が、ルルーシュの姿に大爆笑していた。

「ぷはははっ！！！ルッ！ルルーシュっ！！なんだいその格好はっ！？」

「その格好ってお前たちが無理やり着させたんだろうがっ！！」

「仮面の英雄も形無しだな？」

「黙れ魔女っ！！」

スザクとC．Cのからかいに彼は額に青筋をたてて怒鳴った。
しかしその格好はあまりに滑稽だった。
衣装に開いた穴から出た顔は緑一色にペイントされ、頂上に飾ってある星がピカピカ点滅している。

「私も見たかったです、お兄様のそんなバカっぽいお姿」

「ナッ・・ナナリー・・・お前まで・・・」

自らの最愛の妹も敵にまわってしまい、もはやルルーシュは半泣き状態だ。

「じゃあみなさん揃ったことだしっ！アシュフォード学園生徒会によるクリスマスパーティーを始めまーすぅっ！！」

全員（ルルーシュを除く）が拍手をする。

「そしてぇ～！やっぱりクリスマスと言えばプレゼント回しでしょっ！？」

「プレゼント回し？」

ミレイのその言葉にレイが首をかしげる。

「そうっ！！音楽が鳴っている間、全員で自分の持っているプレゼントを回して、音楽が止まった時に持っているプレゼントが、その人のクリスマスプレゼントってわけ♪」

「な～るほどっ！」

リヴァルが納得したようにポンと手を叩く。

「とゆーことで、各自プレゼントは持ってきたぁ！？」

「「「「「「「「「はーい！！」」」」」」」」」」

「ちょっと待てっ！！俺はそんな話聞いてないぞっ！？」

ルルーシュがミレイのいきなりの発言に驚く。

「クリスマスと言ったらプレゼントでしょ？用意してないあんたが悪いっ！！」

「どういう理屈ですかっ！？（くっ、マズイ・・・このままでは難癖をつけられて罰ゲームという流れになってしまうかもしれない・・・いったいどうすれば・・・・・・はっ！そうだっ！！あいつがいたっ！！）」

「フフフフ・・・フハハハハハハハ！！！！！」

「ルッ・・ルルーシュが壊れた・・・」

急に笑いだすルルーシュにカレンがドン引き。

「残念でしたね会長・・・私には“やつ”がいるっ！！ジェレミアっ！！！！」

「イエスッ！！ユア・マジェスティッ！！！！！」

当たり前のようにガッシャーンッ！！と窓ガラスをブチ破って入ってきたオレンジ。
そして当たり前だが怒るミレイ。

「ちょっと！！うちの学園の窓を割らないでよっ！！」

「ん？すまなかった・・たしかに窓ガラスには借りがある・・情もある・・引け目もある・・・しかしこの場は・・忠義が勝るっ！！！」

「いや・・意味わかんないから・・・」

訳もなく興奮するオレンジにカレンのツッコミが入る。

「ていうか、オレンジさんって出番早くないですか？まだ“ぽぺっ”のシーンもないですよ？」

「そうそう、ギアスキャンセラーも付いてるし」

シャーリーとレイが指摘する。

「全力で気にするな、作者の都合だ」

「ところでジェレミア、どうせ先の会話も聞いていたのだろう？私の言いたいことはわかるな？」

「はっ！！陛下はクリスマスプレゼントを用意されておられないとの情報を、この場にしかけた多数の盗聴器により小耳に挟みましたっ！！」

「盗聴器では小耳に挟むとは言わないでしょ・・・」

恭しくひざまずくオレンジに、カレンのツッコミが再び炸裂する。どうやらこの話では彼女がツッコミ担当のようです。

「それでプレゼントは？」

「こちらでございますっ！！」

そう言ってオレンジがルルーシュに差し出したのは、綺麗に包装された小さな小包だった。

「・・・小さくないか？」

「はい、しかし物は上等です」

「ならよい、下がれ！」

「はっ！！」

そう言ってオレンジは来た時とは別の窓ガラスをブチ破って出て行った。

「よしっ！！これで条件は全てクリアされたっ！！じゃあ始めようじゃないか？フフフ・・・」

「・・・完全にルル壊れちゃったね」

「えぇ・・・」

「そう？いつもあんな感じでしょ」

なぜかキャラの変わったルルーシュを見ながら、シャーリーとカレンとジルはこそこそと話してのであった。

「でわでわぁ～！！まずは皆さん好きなプレゼントを1つずつお持ちくださぁーい！！」

「「「「「「「「「はーい！！」」」」」」」」」

ミレイの合図で、皆それぞれ好きなプレゼントを手にする。

「ミュージック～スタートっ！！」

ジングルベ～ル、ジングルベ～ル、鈴が鳴るぅ～♪
今日もたのっしぃ～クリスッマスゥ～♪

「はい、ストーップっ！！じゃあみんな回し終えたところでぇ～・・・
最初にプレゼントを開ける人～！！」

「はいは～いっ！！」

勢いよく手を挙げるレイ。
彼の小包は赤くてやや小さめの小包だ。

「じゃあレイ！」

ミレイの許可を取った彼は、包装を破って中身を取り出した。

「こっ・・これはっ・・・！！」

小包の中に入っていたのはミニチュアの紅蓮人形だった。
ナイトメアが大好きなレイにはさぞ興奮するプレゼントだろう。

「これってだれの？」

「私です・・・」

ミレイがきくと、カレンが恐る恐る手を挙げる。
するとレイが彼女の元にすっ飛んでいき、思い切り抱きしめた。

「ありがとっ！カレンちゃん♪」

「なっ・・・！！ちょっと離しなさいよっ！！／／／」

「ごふっ！！」

とっさのことにカレンがレイの脇腹に強烈なミドルキックを放ったため、彼は腹を抱えてその場にうずくまった。
そしてそんなカレンを羨ましそうに見るニーナに誰も気がつかなかったのであった。

「まぁ馬鹿はほっておいて・・・次は？」

「じゃあ次は私！」

そういって今度はシャーリーが手を挙げる。
彼女の持っている箱は横長で、持ち運べるような持ち手がついていた。

「わぁ～！！おいしそぉ～！」

箱を開けたシャーリーは、思わず嬉しそうに声をあげた。
その中にはぎっしりとドーナツが入っており、甘くていい匂いを放っていた。

「それは私のお気に入りのマスター・ドーナツの詰め合わせよ」

「ありがとぉ～！」

ジルが説明すると、さっそくシャーリーは1つ取り出してかぶりついた。

「お・・おいしぃ～っ！！」

「食べ過ぎて太らないようにねぇ？」

「うっ・・！！」

嬉しそうなシャーリーに、ミレイがニヤリと毒づく。

「じゃあ次は俺なっ！」

そう言ってリヴァルが小さい縦長で長方形の箱を開ける。
するとそこには銀のネックレスが入っていた。

「これだれの？」

「私ですぅ～」

リヴァルが尋ねると、なぜか残念そうにシャーリーが答える。

「残念だったわねぇ～？ルルーシュに届かなくて」

「へっ！？いやっ・・ちっ・・ちがいますぅーっ！！／／／」

相変わらずミレイはシャーリーをからかって遊んでいる。
そしてシャーリーの方は顔を真っ赤にして必死に否定する。

「じゃあ次は私が・・」

そう言ったのはカレンで、彼女の持っている箱は、他のものよりも少し大きい。
そしてそれを開けたカレンは、驚きの声をあげた。

「わぁ～すごい！」

「本当だぁ！こんなに折り鶴がいっぱい！」

「それは千羽鶴といって、日本の伝統文化だって咲世子さんが言っていました」

みんながカレンの開けたプレゼントに驚いていると、ナナリーが説明した。

「これはナナリーが？」

「はい、咲世子さんにも手伝ってもらいましたけど・・そういえば、この千羽鶴って、病気が早く治りますようにっておまじないもあるんですよ？だから身体の弱いカレンさんに回ってよかったです」

「ありがとう、ナナリー」

ナナリーは笑顔でカレンにそう言うと、彼女もそれに応えるように、優しい笑顔をナナリーに向けた。
いつの間にか復活したレイは、その横でルンルンと紅蓮人形で遊んでいた。

「じゃあ次はニーナっ！！」

「へっ！？」

突然ミレイに指名されたニーナは、戸惑いながらも小さな箱を開けた。
するとそこにはナイトメアの起動キーが入っていた。

「これは・・・」

それを見たその場の全員が固まる。
1人を除いては。

「あ～！それ僕の僕の！ほらあそこ！」

そういって彼が外を指差すと、そこにはいつの間にかサンタの格好をしたサザーランドがあった。
しかも白くて長い髭まで生えている。

「なにこれ・・・」

「ダメじゃないかレイ！勝手に軍のナイトメアを持ち出しちゃっ！」

その異常な光景にミレイや他のメンバーも引いており、スザクはレイに注意をする。
だがニーナは「レイ君のプレゼント・・・」と呟いて呆けた顔をしている。

「はぁ～・・・じゃあ次は私が開けます！」

ミレイは思わずため息を吐くと、自身のプレゼントを開ける。
それは本で、表には『簡単！フレイヤ作成マニュアル！（キット付き）』と書いてあった。

「これって・・・」

ミレイの顔はまさかといった感じで引きつっている。

「うん！みんなに核分裂の素晴らしさを知ってもらいたくて・・・」

「「「「「「「「知らなくていいですっ！！！！」」」」」」」」

これが全員が一致団結した瞬間であった。
そして次はC．Cなのだが、彼女はプレゼントであった手紙を無表情で読んでいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あっ！それわっ！？」

なぜか慌てるリヴァル。
だがC．Cはそんなことお構いになしにその手紙をできるだけ細かく破り棄てた。
そんな様子を見ていたルルーシュが気になって彼女にきく。

「なんだったんだそれ？」

「内容などもはや覚えていないが、相当気持ち悪かった」

「お・・俺の会長へのラブレターが・・・」

リヴァルはｏｒｚ←こんな感じで地面に伏しているのであった。
そんな中、落ち込んだリヴァルを半ば無視する形で、Ｃ．Ｃがおもむろにスザクにきく。

「なんだ？お前は開けないのか？」

「いや、だってこれ・・・」

スザクは苦笑いしながら持っている見慣れた正方形の平たい箱を見る。
それはどこかで嗅ぎなれたチーズの匂いが嫌というほど漂ってきた。

「これ・・Ｃ．Ｃでしょ」

「正解だ、よくわかったな」

「いや、わかるよ・・・こんなもの君しかいないでしょ？」

「こんな物とは失礼だな、まだ中も見てないくせに」

「いや、見なくてもわかるから・・・」

「スザク、これでいつもの俺の大変さがよくわかるだろ？」

「そうだね、ルルーシュ・・・」

「おっ！おい！なんだそれは！この私がせっかく世界で一番崇高な食べ物であるピザを持ってきてやったのだぞ！！」

まぁ確かに何百年も生きてきたであろう不老不死の魔女が言うと、説得力がある。と思う作者。
結局、その箱の中身は、C．Cの胃袋に収まることになった。

「じゃあ次は私」

そう切り出したのはジルで、彼女のプレゼントは、少し大きな紙袋に入っていた。
そしてそれを彼女が取り出すと、その場のみんなが固まる。

「・・・これだれの？」

ジルが両手に持って広げたものは、やけに露出度の高いメイド服だった。
そんなメイド服の送り主は意外な人物だった。

「あっ、それは僕だよ」

「スっ！スザクっ！？まさかお前がそんなやつだったとは・・・見損なったぞっ！！」

「変態」

「馬鹿」

「獣」

「ウザク」

「ちょっ！！みんなひどっ！！」

次々に彼を罵倒する言葉に慌てるスザク。

「こっ！これはクリスマスプレゼントなんて何を選んでいいかわからなかったから、ロイドさんにきいたらこれにしろって言うから・・・」

「やっぱり」

そんなスザクの言い訳に、どうやらレイは納得したようだ。
そしてそんなことをしている間に、ジルはいつの間にかそのメイド服に着替えており、Ｃ．Ｃが少し羨ましそうな顔で見ていた。

「どうですか？ご主人様ぁ・・？」

「「「「「ぐはあぁっ！！！」」」」」

ジルの上目使いに男（オヤジ属性のミレイも含む）は９９９９のダメージ。
そんな馬鹿共はさておき、次はルルーシュの番だ。
彼もジルと同じような、少し大きな紙袋に入っていた。
そしてそれをルルーシュが取り出し、広げると、今度はその場で彼だけが固まる。

「なんなんだこれは・・・っ！！」

「あぁ、それ私の♪」

そう言ったのはミレイで、ルルーシュが持っていたのは、淡い紺色を基調としたドレスだった。
そして本日2回目のお約束。

「スザク君！！レイ！！ジル！！」

「「「イエス・ユア・マジェスティ！！！」」」

「おい！！間違ってる！！間違っているぞお前たち！！それは皇帝に対しての・・というよりさっきもこんなやり取り・・ってどわふっ！！」

ミレイの命令にきびきびと答えた3人は、ジルは背後から羽交い絞めにし、レイとスザクは暴れる彼の足を抑えつける。

「おっ！！おい！！ジル！！またなにかあたってるぞっ！！／／」

背中に感じた柔らかい2つの感触に、ルルーシュは顔を再び真っ赤

にする。
そしてそんな彼に更なる魔の手が忍び寄る・・・

「さぁ～、ルルちゃ～ん？2回目のお着替えの時間ですよぉ～？」

ドレスを手に持って、ニヤニヤ近づいてくるミレイ。
もはや成すすべなく冷や汗をかくルルーシュ・・・

「ちょっ！会長っ！！いっ、いやっ！！止めてくださいっ！！いやちょっ！！やめ・・・ナッ・・ナナリィィィィ――――――――ッッッッ！！！！！」

数分後――…

「わぁ～・・相変わらず様になってるわねぇ～」

「本当ですよぉ～、私、自信なくしちゃいました」

「そっ・・そんなにジロジロ見るなっ！！」

今度は誰も笑うことなく、ミレイとシャーリーはまじまじとルルーシュを見る。

「だが相変わらず性格は最悪だな」

「お前にだけは言われたくない」

C．Cの皮肉にそう返すルルーシュ。

「私もお兄様の女性姿見たかったです」

「心配しなくてもあなたのお兄さんはシスコンだからいつでも着てくれるわよ？」

「どんな理由だそれっ！？」

少し寂しそうなナナリーの手を握ってそう言ったジルに、ルルーシュがつっこむ。
そしてついに最後のプレゼントになった。

「最後は私ですね？」

「ていうことは送り主は「俺だ」」

ミレイの言葉を遮り、ルルーシュが一歩前にでる。
ナナリーが持っているのは、先ほどオレンジが持ってきた箱だ。
彼女はゆっくりとそれを開けた。
するとそこにあったのは・・・

「・・・・・・・・・・・・・みかん？」

「「「「「「「「「・・・・・・・・」」」」」」」」」」

しばしの沈黙・・・

「ジェレミアっ！！！！」

「イエスッ！！ユア・マジェスティッ！！！！」

ルルーシュが呼ぶと、当たり前のようにガッシャーンッ！！と再び別の窓ガラスをブチ破って入ってきたオレンジ。

「なんなんだこれはっ！？」

「はっ！！それは今年、我がゴットバルト農園で収穫した、一番の上物のみかんでございますっ！！」

「馬鹿かっ！！馬鹿なのかお前はッ！？だれがクリスマスのプレゼントにみかんをもらって喜ぶ馬鹿がいるっ！？しかもナナリーだぞっ！？」

「もっ！申し訳ございませんでしたっ！！」

オレンジは勢いよく床に頭を擦りつけて土下座をする。
こうして、なんやかんやでクリスマスパーティーは幕を閉じた。

STAGE ?? 【生徒会のクリスマス】（後書き）

どーしてもやりたかったんです！！
とてつもないグダグダ感の話をっ！！
オレンジは友情出演ですねw
マスター・ドーナツはとあるドーナツショップのパクリで、ジルお気に入りのお店という設定ですw
好評でしたら、こういったイベントごとの話も作っていきたいなと思ってオリます。

ＳＴＡＧＥ　０６　【奪われた仮面】（前書き）

＊誤字・脱字の指摘お願いします＊

STAGE　06　【奪われた仮面】

【アシュフォード学園】

「本日付をもちまして、このアシュフォード学園に入学するここになりました、枢木スザクです、よろしくお願いします」

ルルーシュは目の前で自己紹介をしている男に目を釘付けにしていた。
それは昔、日本とブリタニアの戦争で離ればなれになり、7年の歳月を経てシンジュクで奇跡的な再会を果たした親友だった。
ついこの前も彼を助けたが、それはゼロとしてであり、彼は知らない。

「ところでスザク君、もう1人は・・・？」

どうやら転校生はもう1人いるらしいが、姿が見えないので教師がスザクに行方をきいた。
すると、何故か彼は少し困ったような顔をしている。

「えっ？その・・・えっと・・・逃げました・・・」

「「「「「「「「「はい！？」」」」」」」」」

思わずクラス一同が満場一致で声をあげる。
転校初日でサボるとは・・・ルルーシュ以上だ・・・と全員が思ったかどうかはご想像にお任せしよう。

「そこの廊下までは一緒だったんですけど、『僕の自己紹介は君に任せるっ！』とか言って・・・」

「「「「「「「「「・・・・・・・・・」」」」」」」」」

もはや言葉にできないクラス一同であった。

そして自己紹介は終わり、今日もアシュフォード学園の一日が始まった。
しかし、誰も新しい転校生、枢木スザクに話しかける人はおらず、皆が彼を遠巻きで見ながらコソコソと話している。
無理もないだろう。
名誉ブリタニア人とは言え、元はイレブン。
しかも先日までクロヴィス殺害の容疑者として捕まっていたのだ。

「怖がってるだけじゃダメよぉ！話してみればどんな人か・・・うっ？」

シャーリーはいつもの行動力（ルルーシュに関しては例外だが）を発揮して、スザクに話しかけようとするが、リヴァルがそれを止めた。
そんな中、スザクの傍をルルーシュが通り過ぎた。
思わず彼はルルーシュを見る。
すると彼はちらりと横目でスザクを見ると、襟元に手を伸ばし、一度だけクイッと上に持ち上げた。
スザクはハッとした。
それは7年間変わらぬ2人だけの合図だった。

【学園内・屋上】

「ふぁ～・・・」

初日に自己紹介すらサボったレイは、独り屋上で大きなあくびをしていた。
なぜ自分がこんなめんどくさいことをしなくてはいけないのかと、彼は心の中でずっとぶつぶつと文句をたれていた。
まずはこうなった経緯を説明しよう。

スザクがユフィと出会う
←
ユフィがスザクを学校に通えるように取り計らう
←
スザクがお節介でレイも通えるようにとユフィに頼む
←
レイはそれを断ろうとする

←
皇女殿下の計らいを断るなんて！とセシルに怒られる
←
結局通う羽目になる

といった具合だ。

「学校なんて通うくらいなら一日中シュミレーター乗ってた方が楽しいのに・・・」

そんなことを呟いていると、突然屋上の扉らが開き、1人の黒髪の少年がやってきた。
その少年はレイの存在に気づくことはなく、そのまま屋上の手すりに腕を乗せてもたれかかった。
そしてしばらくすると、もう1人の見慣れた少年、スザクがやってきた。
2人は何やら親しげで、とても今日、昨日知り合ったようには見えなかった。
ただでさえ、オープンな学風といえど、スザクにとっては友達を作ることは難しいだろうと思っていたので、レイは内心驚いていた。

「（昔からの友達なのかな・・・？）」

少し距離があるので、声までは聞こえないが、レイはその様子を影

から見ていた。
そのうち、黒髪の少年はその場を後にし、スザクが独り残された。
それを見計らい、レイはスザクに忍び寄り、急に彼の前に姿を現した。

「スーッザクちゃん♪」

「レイっ！？いつからそこにっ！？」

スザクは驚いているより、どうやら焦っているように見えた。

「最初からこの屋上にはいたけど・・・なんかマズかった？」

そんな様子を不思議に思ったレイは、首をかしげてスザクにきいた。

「（この様子ならきいてなかったみたいだね・・・）」

逆にレイの様子をみた彼は、先ほどの会話はきかれていないようなので、ほっとした。
聞かれれば、彼がブリタニアの皇子であることがバレてしまう。
そんなことは彼とナナリーのためにも、断じてあってはならないのだ。

「その様子だと相当マズイことを話してたんだね？」

「いや・・それは・・・」

いつもは気が抜けているが、意外と鋭いレイにスザクは冷や汗を流す。

「大丈夫！大丈夫！何にも聞いてないって！ただ正直スザクがこの学園で友達ができるなんて思わなくてね？」

「そっか・・・」

そう言ったスザクの顔は、どこか懐かしそうで、悲しそうだった。

「昔からの友達なんだ・・・」

「やっぱり・・・まぁよかったじゃん？これでこの学園に2人の友達ができた♪」

「2人？」

「僕と彼♪」

「ふふ・・そうだね」

レイの言葉に、スザクの悲しい顔が笑顔が戻った瞬間だった。

【クラブハウス・リビング】

その夜、ルルーシュはスザクを招いて、ナナリーと3人で久々に楽しい食事をしていた。

「スザクさん、今日は泊まっていけるんでしょう？」

「スザクはもうこの学校の生徒なんだ、だからいつでも会えるよ」

いつもより楽しそうに話すナナリーをルルーシュは少し嬉しそうな顔で見ながら言った。
いつも周りの人間を気にして無理に笑顔を作っていることが多々あるナナリーが、今日は心底楽しそうに笑っているのだ。

「軍隊の仕事があるから、毎日は無理だけどね」

「軍隊・・・続けるんですか・・・・？」

そんなスザクの一言に、今まで明るかった彼女の表情は曇ってしまう。

「大丈夫！技術部に配置換えしてもらったから、そんなに危なくないよ？」

「そうか、技術部か」

それをきいてルルーシュは安心したように言った。

ナナリーはまだ若干不安そうだが、ひとまず生命の危機はないのだろうと思い、ほっとしていた。
そんな中、突然、リビングの扉が開いた。

「「うおっ！？」」

「どうかしました？」

ルルーシュとスザクはリビングに入ってきた1人の女性の姿に驚き、目の見えないナナリーは妙な声を上げた2人を不思議に思い、訪ねた。
そこには下着姿で、眠そうに目をこするジルの姿があったのだ。

「ジルっ！いつも服くらい着ろと言ってるだろう！！」

思わず慌てたルルーシュが言った。
状況が読めたナナリーは静かに笑っている。

「だから取りにきたんじゃない」

それをジルは気にする様子もなく気だるそうに椅子にかけてあるバスローブを指差した。

「あの～・・・彼女は？」

顔を赤くしたスザクは目を反らしながらも、バスローブを着ている彼女を横目でチラリと見ながらルルーシュにきいた。

「彼女はジル・フランゾワース、俺たちとここに住んでいる・・・彼は枢木スザク、俺の昔からの友達だ」

「あっ、よろしく」

「こっちこそ」

そういってジルとスザクは握手をした。

「でもどうしてここに住んでいるんだい？」

「それは・・・」

ルルーシュはスザクにきかれたことを言ってもいいのか、ジルに視線を向けて確認する。

「私は記憶がなくてね・・・行くところもないから、ここに住まわせてもらってるの」

ルルーシュのそんな目線に気づいた彼女は、それを自分からあっさりと言ってしまった。
実際は別に女子寮に住めばいい話なのだが、ミレイが面白半分でジルを住まわせていることを、ルルーシュとジルは知る由もなかった。
それはさておき、スザクはそれをきいて彼女と同じような1人の人間を思いだした。

「そういえば、今日いっしょに転校してきた僕の友達も、記憶喪失だって言ってたけど」

「えっ？」

ジルはそれをきいて驚いた。
彼の話が本当なら、自分と同じように実験体となった人間かも知れない。
そのことをスザクに話すべきかどうか迷ったが、情報の出所がC・Cのため、いろいろと詮索されたら面倒だと考え、言うのは止めた。
ルルーシュもどうやら同じことを考えていたらしく、こちらを時折横目で見ながらも、彼女が実験体であることを話すことはなかった。

「あの・・ジルさん・・・その方と会ってみてはどうですか？そう

すれば何か記憶を思い出すきっかけになるかもしれませんし・・・
スザクさんも、その方に話して、頼んでいただけますか？」

「もちろんだよ！」

ナナリーがそう切り出し、スザクは笑顔でそれを了承する。

「そうね・・・私、お茶を入れてくるわ」

「あっ、手伝うよ！」

ジルが、そう言って机の中央にあったティーポットを持つと、スザクが立ち上がった。
しかしルルーシュがそんな彼を止めた。

「座ってろって、今回はこっちがホストなんだ・・お前、なんか大人しくなったな？」

「君はがさつになった」

「ふふっ、はいはい」

そう言ってスザクは再び座り、3人で会話に華を咲かす。
そんな彼らの様子を少し羨ましく思いながら、ジルはティーポットを持って奥のキッチンへと向かった。

「あの男・・・シンジュクで会ったブリタニア軍人だろ？いいのか？」

そこにはいつもの拘束服を着たC．Cが、腕を組んでシンクにもたれ立っていた。

「彼はルルーシュにとって相当大切な友達のようね・・・」

「なぜわかる？」

「ナナリー以外で、彼が他人にあんな顔を向けるのは初めて見たわ・・・」

「なんだ？嫉妬か？」

C．Cは口元に嫌らしい笑みを浮かべる。

「いいえ・・・ただ・・・・・・彼らが少し羨ましかっただけ・・・」

「ふっ・・・・・・それで？お前はどうする？」

C．Cの笑みが嫌らしいものからなにやら含みのあるものへと変わる。

「・・・だれであろうと、彼の邪魔をするなら・・・殺すまでよ・・・・」

そう言いながらお茶を入れる彼女の顔は、酷く険しいものだった。

【翌日】

「ほわぁっ！！！」

このルルーシュの人生初の素っ頓狂な声で、ドタバタの一日は幕を開けた。

「くそっ！猫のっ！分際でっ・・！」

奇しくも猫にゼロの仮面を取られ、必死に追いかけるルルーシュ。

「（えぇい！こんな時、テロリストがいれば包囲作戦を展開できるのに！！）」

そんなことを思いながら彼は猫を追いかけひたすら走る。
だが体力に関して全く無縁な彼は、逆に猫に遊ばれるようであった。

「（カレン・・いやダメだっ！これ以上怪しまれるのは・・・はっ！そうだっ！ジルがいるじゃないかっ！）」

ふと気付いたルルーシュは猫を追いかけながら懐からケータイを取り出す。
そしてジルの番号をプッシュした。

プルルル・・・プルルル・・・

そして肝心のジルは、自室でドーナツを呆けた顔で食べていた。
これは最近彼女が商店街で見つけ、一目惚れした、“マスター・ドーナツ”のドーナツだ。
プレーンはもちろん、チョコや、ホイップクリームが中に入っているものなど、形や味は様々で、その中でも彼女はチョコのかかった、もちもちした触感の“もっちリング”が大好物だ。
そして最後に残していたそれに手を伸ばした丁度その瞬間、ルルーシュから電話がかかってきたのだ。
一瞬ムスッとした彼女だが、しかたなく電話に出ると、なぜか電話の彼は息絶え絶えだった。

『よっ・・！よかっ・・たっ！じっ・・ジルっ！猫にっ・・・！仮面っ・・がっ・・・取られ・・たっ・・・ってどわぁっ！！』

ブツッ・・・ツー・・ツー・・

「・・・・・はいぃ――――っ！？！？」

しばしの沈黙の後、ジルは思わず声を張り上げた。
ルルーシュは何かにつまずいてずっこけ、その拍子に電話が切れたらしい。
しかし今の彼女にはそんなことを気にする余裕もない。
もし仮面が見つかったら彼はゼロとして捕まってしまう。
断じてそれだけはさけなくてはいけない。
せっかく自身も今までいろいろと準備をしてきたのだ。
今さら彼に捕まってもらうのは困る。
それにこれで捕まればあまりにマヌケだ。
焦った彼女は大好物のドーナツに手をつけるのを諦め、急ぎ猫を捕まえるべく部屋を飛び出した。
そんな最中、事態をさらに悪化させる校内放送が入る。

ピンポンパンポーン・・・

『こちら、生徒会長のミレイ・アシュフォードです・・・猫だっ！！校内を逃走中の猫を捕まえなさい！部活は一時中断！協力したクラブは予算を優遇します！そしてぇ～・・・猫を捕まえた人にはスーパーなラッキーチャンスっ！生徒会メンバーから、キッスのプレゼントだぁ――っ！！！お――ほっほっほっほっほっほっほ――――！！！！』

こうしてミレイの高笑いが学園中に響き渡り、この放送を聞いた生徒は、慌ててプールの飛び込み台から落ちた者や、お嬢様の唇を奪おうと躍起になった者、それを阻止しようとした者、思わぬ性癖をカミングアウトした者・・・反応は様々だった。

『猫を捕まえたら所有物は私に！私に！渡しなっ・・げほっ！げほっ！げほっ！』

「くっ・・！会長っ！余計なことをっ！！」

興奮しすぎてせき込んだミレイに、ルルーシュは悪態をつきながら猫を追う。
しかし途中で見失い、さらに必死になりながら猫を探す。
すると校舎と時計台を繋ぐ渡り廊下の屋根の上で猫が走って行くのが見えた。
彼がそれを追いかけると、そこでスザクと鉢合わせた。
しかも時計台の階段の方を見ると、ジルがすでに階段を昇り始めていた。

一方その頃―…

「ん？」

レイは屋上で昨日と同じように授業をサボり、昼寝をしていた。
しかし、外がなにやら騒がしいことに気が付き、身体を起こして辺りを見渡すと、近くの時計塔の周りに人だかりができていた。
気になってその時計塔を見てみると、そこには頭部は頂上のベルで確認することはできないが、猫らしき動物が、そこにちょこんと座っていた。

「へぇ〜、面白そう♪」

そう呟いた彼は屋上から助走をつけて勢いよくジャンプし、時計塔の窓を突き破って階段に出た。
そんな様子を見ていた周りのギャラリーからは、どよめきと歓声が上がった。
そんなことはつゆ知らず、彼が服の埃を払っていると、すでに昇っている人間がいるらしく、上から声が聞こえる。
それを聞きながら彼は面白そうにそのあとを追いかけ始めた。

【時計塔・屋根の上】

「全く・・ルルーシュの馬鹿が・・・」

ジルは悪態をつきながら猫まであと一歩のところにいた。
確かに猫はゼロの仮面を被っている。

「ジル！大丈夫かい！？」

どうやら後ろからスザクも追ってきているようだ。
なぜか真っ赤な顔を反らしているが、そこは放っておこう。

「スザクっ！その猫はジルに任せて・・・」

「女の子にそんな危険なことさせられないよっ！」

「いいからここはっ・・どわぁ！！」

そしてその後からスザクを止めようとしたルルーシュが、バランスを崩した。

「ルルーシュっ！！！」

それに気づいたスザクは彼を助けるために自身も落ちて行きながら手を伸ばす。
ジルもそれに気づいていたが、流石にここからでは間に合わず、スザクに託すしかなかった。
しかしスザクはルルーシュの腕をつかんだまでは良かったが、窓枠に手が届かず、２人一緒に落ちて行く。

「しまっ・・・！！」

スザクは焦った。
下からも悲鳴が上がっている。
もうダメだ・・・
ルルーシュも、スザクも、ジルも、下にいたギャラリーも皆がそう覚悟し、思わず目を閉じた。
だが２人が落ちることはなかった。

「おっと危ない」

そんなセリフが聞こえ、スザクはゆっくりと目を開けた。

するとそこには彼の腕を窓から身を乗り出して捕まえているレイの顔が目に入った。
その後、レイは2人を引き上げ、ジルは猫を捕まえたが、仮面はすでに外れており、少し下の突起に引っ掛かっていた。
なので猫をスザクに預け、レイと先に下に帰らせ、仮面を回収したのち、それをルルーシュに渡した。

「やっぱりこの前の猫だったか・・・」

「この前？」

「うん・・・実は・・あっ・・・・・」

時計塔から先に猫を抱えて降りてきたスザクとレイに、さまざまな視線が向けられる。
何故か数人の女子がレイの方を呆けた顔で見ていることも付け加えておこう。
そんな状況に耐えかねたシャーリーが2人に駆け寄る。

「ありがとう！ルルを助けてくれて！」

「やるじゃん転校生ｰ　ｓ！」

「この猫、なにか持ってたでしょ！？」

彼女に続いて、リヴァルやミレイも声をかける。
それにスザクは少し嬉しそうに答える。

「何か被ってたみたいですけど、よく見えませんでしたし、ジルさんがこの猫を捕まえたんで・・・」

「ところでルルは？」

「あっ、忘れ物があるから、先に行けって・・・」

「それだぁ――――っ！！！あいつの恥ずかしい秘密っ！！」

「そういうことですか・・会長・・・」

そんなことを話していると、時計塔からルルーシュがジルと一緒に

戻ってきた。

「ねぇジル！あなた、こいつの恥かしい秘密見たっ！？」

「えぇ、彼が将来を言い交わした相手へのそれはそれはお熱いラブレターが「ジルっ！！」冗談よ！冗談！ルルーシュが言ったら本当に殺しそうなんで黙秘させていただきます」

ジルが適当なことを言っていると、ルルーシュが怒ったので、彼女は笑ってごまかした。

「うぅ～・・・私も見たかったなぁ～・・・ところであなたは？」

心底落ち込んでいるミレイが、話題を変えて隣に立っているレイに目線を移す。

「あぁ、彼は僕と一緒に転校してきた友達のレイ・チェスターっていいます」

「どーも♪」

スザクの自己紹介を受けた彼は、いつものスマイルで挨拶をした。

「あなたが転校初日にサボったって言う噂の・・・」

「（これが私と同じ記憶喪失の転校生・・・）」

ミレイが何やら興味深そうな顔でレイを見る傍ら、ジルは彼の後姿を見ていた。

「ねぇ・・2人って友達なの？」

「だって・・イレブンと・・・」

先ほどまで静かだったカレンとニーナが言った。
そして彼女たちの発言に周りが騒がしくなる」

「それは・・「友達だよ」」

スザクが言い訳に困っていると、ルルーシュはそう断言した。

「会長、彼とジルを生徒会に入れてくれませんか？」

「う～ん・・・ジルちゃんはそのつもりだったけど・・そうね、スザク君には部活は厳しいだろうし、副会長の頼みとあっちゃね？」

「あの・・・できれば彼もいいですか・・・？」

そう言ってスザクは遠慮がちにレイの方を見ながら言った。

「えっ？僕？僕は別「もっちろん！じゃあ決定ね！？」」

レイの意見はミレイによってもみ消され、彼ら3人はこうして生徒会に入ることが決まったのであった

。

STAGE　06　【奪われた仮面】（後書き）

ホントはこれ、クリスマスの前に投下するべきでしたね…（笑）
まぁ大したことではないんですけど。
レイのサボり癖はきっとルルーシュよりひどいですねw
もともと彼は集団行動は苦手なんですよ。
そしてジルはどうでしょう？
ルルーシュが好きなのかな？なんて思っている人もいると思いますが、きっと彼女はC．Cと同じような共犯者といった感じなんでしょうね。
ちなみにニーナはレイに一目惚れしたって設定ですw
えっ？ユフィとはどうなるのかって？
それは今後の展開でw

以上、くだらない後書きでした！
あっ、良ければ感想とかいただけたら嬉し（（殴

STAGE　07　【黒衣の女王】（前書き）

＊誤字・脱字の指摘おねがいします＊

STAGE　07　【黒衣の女王】

【政庁・ＫＭＦ保管庫】

クロヴィスに変わり新しくエリア１１の総督の座についたコーネリアに呼び出された特派のロイドとフラーとレイは、ナイトメアの保管倉庫の視察をしている彼女とともにいた。

「第七世代のＫＭＦでして、その能力は通常の・・・」

そんな中、なんとかランスロットの性能を認めてもらい、作戦に参加させてもらえるように説得するロイド。

「そのランスロット・・パイロットはイレブンだと聞いた」

「はい、名誉ブリタニア人です・・しかし・・・」

「一等兵から准尉に特進させた、それだけで満足せよ！ナンバーズなどに頼らずとも私は勝ってみせる」

「はぁ～・・・ではこっちの方は？」

そういってロイドは後ろにいたレイを半ば強引にコーネリアの前に押し出した。
彼はいつも通りニコニコしており、彼女はそんな彼を見て眉を寄せた。

「記憶がないとはいえ、血液検査の結果、お前はブリタニア人・・しかも皇族の血が多少混じっているそうだな？」

「えっ？そうなんですか？」

レイは初耳ですと言わんばかりにキョトンとしている。

「聞いてないのか？」

「あはぁ～！！忘れてましたぁ～！！」

「相変わらずナイトメア以外では無能なんですね」

悪びれもしないロイドの態度にイラッときたフラーは思わず口にした。

「とにかく、お前に関しては中尉に特進させ、騎士侯の身分を与えた・・それで、お前がベティヴィアの開発者か？」

コーネリアはフラーの方に向き直る。

「はい・・といっても私は武器の開発が専門でありますので、機体についてはランスロットを流用していますが・・・」

「そうか・・そちらのナイトメアに関しては考えておこう、ランスロットは保留だ」

「そんなぁ～・・・」

「感謝します」

残念がるロイドを、傍から見れば相変わらず無表情で横目に見ているフラーだが、最近のレイには彼女の些細な表情の変化を感じ取ることができた。
あの顔はきっと「ざまぁみろ！」と思っているに違いない。

「チェスター中尉！」

「あっ、はい・・なんでしょうか殿下？」

そんなことを考えていたレイに、突然コーネリアから声がかかった。
自分に声をかけた彼女を少し不思議に思いながらも、一応軍人らしくその場に直り、返事をした。

「お前の正体についてはこちらでも調べておこう、遠いとはいえ、皇族関係というのは間違いないからな」

「ありがとうございます」

こうしてコーネリアは踵を返してその場から去って行った。

「あんまり驚かないね？」

ロイドが後ろから彼を覗き込むようにしてきいた。

「まぁ別に自分の正体なんて僕には興味の範囲外だからね♪」

「へぇ～、意外だねぇ～？普通はこういう場合って気になるものだと思うけどぉ？」

「私は安心しましたよ、自分の作ったナイトメアに乗るのが、どこかのナイトメアと違って皇族の方で」

「それって僕のパーツに対する嫌味？」

フラーの毒舌にロイドが眉を寄せる。
しかし彼女は悪びれもせずさらに言葉を続ける。

「いいえ、あなた個人に対する嫌味です」

「・・・僕って君の上司だよね？」

「はい、不本意ですが」

そんな2人のやりとりを苦笑いして見ているレイであった。

【アシュフォード学園・ルルーシュの部屋】

『軍部は、テロリストの潜伏するサイタマゲットーに対して包囲作戦を展開中です、コーネリア総督が現地入りされたため、立ち入り制限が発令されました、二時間後に総攻撃が開始される模様です・・・』

「ふんふふ～ん・・・♪」

C．Cはいつもの拘束服を着てベットの上で寝転がりながら、ルルーシュの部屋で楽しそうにピザのポイントシールを台紙に張り付けいた。

つけっぱなしのＴＶから聞こえてくるニュースも彼女の耳に聞こえているか不確かだ。
するとそんな中、部屋の扉が開き、ルルーシュが怖い顔をして戻ってきた。

「どうした？乗るつもりか？敵の挑発に」

どうやらニュースは聞いていたようだ。

「ふっ・・わざわざ正体してくれたんだ・・・それに、コーネリアにはききたいこともあるしな・・・」

ニヤリと笑ったルルーシュは、クローゼットの奥から大きなショルダーバックと、隠してあったブリタニア軍歩兵の兵装をひっぱりだし、それをまとめていた。

「ブリタニアの破壊と母殺しの犯人を見つけること・・・お前はどっちが大事なんだ？」

「同じだよ、その２つは・・ブリタニアの皇族は、次の皇帝の座を巡って常に争っている・・・いや、争わされているんだ・・・あの男にっ！！」

「だがそれがブリタニアの強さでもある・・そうして勝ち残った最も優秀な人間が次の皇帝になるのだから」

「そうだ、弱者は全て失い這いつくばる・・・ブリタニアってのはそういう国だ、そういう世界だ！」

「弱肉強食は厳守のルールだ」

「だとしたらっ！ナナリーはどうなるっ！？弱いから諦めなくてはならないのかっ！？俺だけは絶対に認めないっ・・・！そんな世界、俺が消し去って・・・なっ！？」

怒り心頭になったルルーシュは、荷物をまとめ終えると、どこか出かけよと立ち上がる。
しかしC．Cが部屋の出入り口に立ち、彼に銃口をむけていた。

「行くなルルーシュ、私との契約を果たす前に死んでもらっては困るからな」

「言ってることとやってることが違うんじゃないか？」

「殺しはしない・・足だけ撃って大人しくしてもらうさ」

「なるほど、お前ギアスは使えないんだな」

ルルーシュはニヤリとし、C．Cは顔を強張らせた。

「まぁ予想はついていたけどな・・自分でやれるなら、俺に頼んだりはしないだろう？」

そう言って彼も懐から銃を出し、彼女に銃口を向けた。

「私が銃を恐れると思うのか？」

C．Cはその行動をあざ笑うかのように言った。
そう、彼女は不老不死なのだ。
銃でどこを何発撃たれようが死ぬことはない。
痛みは感じるだろうが、それはもう慣れてしまった。
だがルルーシュはそんなことはわかりきっているとでも言いたげな顔をしている。

「恐れるさ？」

彼はそう一言だけ言葉を発すると、持っていた銃を自分の頭に突きつけた。

そんな彼の行動にC．Cは驚く。

「俺は、お前に会うまでずっと死んでいた・・・無力な屍のくせに、生きているって嘘を吐いて・・・何もしない人生なんて、ただ生きているだけの命なんて、緩やかな死と同じだ・・・また昔みたいになるくらいならっ・・・！」

ルルーシュは銃の引き金に手をかけた。

「まてっ！」

向けていた銃を下し、それを慌てて止めるC．C。

「確かに・・意味はないな・・・そんな命・・・」

長い時間をただ生きてきた彼女には、彼の気持ちが痛いほどわかった。
ひとつだけ違う点を挙げるのなら、彼には“死”という選択肢が与えられていることだろう。
だが自分にはそれすらも許されない。
だから今はこの男を死なせるわけにはいかない。
そんな風に思いながらも、彼女はふっと悲しそうに笑った。

「ただ生きているだけの命・・・か・・・・・・」

ジルはそんな2人のやりとりを、部屋の外で壁にもたれかかって聞いていた。
きっとコーネリアの挑発に乗るだろうと思った彼女は、彼にある頼みごとをするために部屋に来たのだが、なかなか入るタイミングが掴めなかったのので、外で立ち聞きをしていたのだ。
それは自分にも思う節があった。
だが今は自分には生きる目的がある。
そのためにC．Cと同じようにジルにとっても彼に死なれては困る。
予定より早いが仕方ない・・・
彼女がそんなこと思った矢先、部屋の扉が開いた。

「・・・ジル」

大きなショルダーバックを肩から下げて現れたルルーシュは、少し驚いた顔をしている。

「あなたに頼み事があるの」

「あぁ、わかっている・・例の件だろ？俺もそのつもりだったしな・・・」

「あっちの準備はあなたのおかげでスムーズに済んだわ・・一体ど

んな手を使ったわけ？」

「だから言ったろ？俺には力があると・・・」

ジルが額に皺を寄せながら尋ねると、彼はニヤリを笑って言った。

「まぁいいわ・・私も行くから」

「君も・・・？俺1人で充分だが？」

「相手はコーネリア・・・用心に越したことはないわ」

彼女は今日まで、ただただ過ごしていたわけではない。
ルルーシュや、インターネットを使って今のブリタニアの情勢や、皇族についての情報をひたすらに集め、一通りのことは把握している。
その過程でコーネリアが成し遂げてきた数々の成果についてもおおよそ知っている。
力を手に入れたと言っているルルーシュは、おそらく本人には自覚はなくとも、少しばかり有頂天になっているのだろう。
わずかなミスが命取りになるのが戦争だ。
彼がそれを犯さない為にも、自分がブレーキをかける必要があるのだ。

「・・・わかった・・じゃあ俺は先に行く、少し仕込みも必要だしな」

「えぇ・・私も準備が終わったらむかうわ」

「それじゃあ後で・・・」

そう言って彼は踵を返して歩き出した。
しばらくその後ろ姿を見ていたジルは、彼が見えなくなると、自身も準備のためにいったん自室に戻って行った。

【サイタマゲットー】

そこで聞こえるのは逃げ惑う人々の悲鳴と、それを嘲笑うかのよう

に鳴り響く銃声や爆発音だった。
辺り一面瓦礫の山とし化し、死体の焼けた匂いや、血なまぐさい異臭が立ち込めている。
テロリストを匿っていたというだけで、女子供まで無差別に殺す必要があるのか？
そんなことを思いながら、ジルはゲットー内の戦場から少し離れたとある廃ビルに、運搬用のトラックを隠し、自身はルルーシュが指定したポイントに隠れていた。
目の前で殺されていく人々・・・
彼女は遣る瀬無い気持ちでそれを見ていた。
助けたいのは山々だが、今回の目的は最低2機、できれば3機のサザーランドを鹵獲し、それをトウキョウ租界に用意した倉庫まで運び出すことだ。
ジルはゆっくりと深呼吸をし、自分の感情を抑えつけた。
コーネリアの性格上、おそらく大規模な掃討作戦を展開し、ゼロを炙り出すだろうと言うことは予想の範ちゅうだったので、すでにそれが行われそうなゲットーには数台のトラックを隠してはあった。
そのおかげで、1機目はすんなり回収することができ、今は2機目を待っているところだ。
ルルーシュは変装は必要ないと言っていたが、念のためにブリタニア軍の兵装をしている。
そして予定通り、彼女の持っていた無線機にルルーシュから連絡が入る。

『今、1機そちらに向かわせた』

「了解」

しばらくすると1機のサザーランドがむかってきた。
もしかしたら敵という可能性もあるので、彼女は腰に提げたマグナムに手をかける。
しかしサザーランドは彼女の前で止まり、コックピットのハッチが開くと、中から中年のブリタニア軍人が出てきて彼女に話しかけた。

「あなたがゼロの使いですか？」

「そうだ」

「ＩＤはＥＸ１ＹＧ２Ｆ４です」

その軍人はそれだけ言うと起動キーを彼女に投げ渡し、自身はその場で持っていた銃で自ら頭を撃ち抜いた。
ジルは思わずフードの下で眉をひそめた。
先ほどの時も同じようにサザーランドを持ってきたブリタニアの軍人も、頭を自ら撃ち抜いて死んだのだ。
これが彼の言っていた力なのだろうか？

「（相手にどんな命令も下せる力・・・もしくは相手の意識をコントロールできるのかしら？）」

彼女はおおよそそんな風に、彼の力を予想していた。

現実的に考えたら、あまりにも馬鹿馬鹿しく、あり得ないが、ほぼ不死である自分が言えたことではないのだろう。

「まぁいいわ・・・これであと1機・・・」

そういって彼女はコックピットに乗り込み、ＩＦＦを外すと、急ぎ、サザーランドを発進させた。

「Ｒ－１、Ｒ－２はそのまま後退、敵をＮ－２のいる位置まで引きずり出せ、Ｂ－７は二時の方向に射撃」

ルルーシュはシンジュクの時と同じように、テロリストを使い、順調にブリタニア軍を追いつめてゆく。
先ほど、３機目のサザーランドのパイロットにギアスをかけ、ジルに指定したポイントに向かわせ、これでそちらの作戦の方は上手くいった。
後は本陣の守りを崩し、コーネリアを引きずり出すだけだ。

「Ｐ－５のチームは斉射開始」

「Ｎ－２、そのまま右上方に」

「Ｒ－４、撃て」

「Ｎ－１は左の奴から」

「よし、Ｐ－３、橋を落としてルートを断て」

ルルーシュの見事な戦略により、ブリタニア軍は次々と壊滅してゆく。

そのあまりの順調さに、思わず彼の口元に笑みがこぼれる。

といってもあまりにあくどい笑みなのだが・・・

【Ｇ－１ベース】

前の大画面モニターで、次々と自軍がＬＯＳＴしていくのを、コーネリアは頬杖をつきながら座って見ていた。
だが彼女や、その親衛隊は全く焦った様子はなく、一緒に居合わせている参謀たちだけが再び起こったその出来事に焦っていた。
そしてある程度のところでコーネリアが告げた。

「ここまでだな・・・全部隊に後退を指示せよ！これ以上の被害は意味がない」

「退却ですかっ！？」

「恐れながらまだ戦えますっ！！」

参謀たちはそう息巻いていたが、コーネリアが彼らの意見を聞き入れることはなかった。

『全軍に告げる！ゲットー外円部まで至急後退せよ！配置は問わない！ゲットー外円まで至急動け！』

コーネリアの指示を受け、ダールトンが全軍に退却命令を出した。
それをサザーランドのモニターで見ていたルルーシュは、そのあっけなさに少し物足りなさを感じていた。

「なんだ張り合いのない・・・だがこれで条件はクリア・・・フフフ・・」

そう言ったルルーシュには自信の笑みが浮かんでいた。
だが彼はこの後、組織と言うものがなんたるかを思い知ることになる。

ジルは3機目のサザーランドをトラックに乗せながら、モニターを見ていた。
最初は次々にブリタニア軍が撃破されていたのだが、全軍が後退し、数機のグロースターが発進すると、今度は逆にテロリスト側のサザーランドが次々に破壊されていく。
おそらくコーネリアの親衛隊なのだろう。

そしてついには制圧が完了し、作戦終了のアナウンスが聞こえた。
ルルーシュは先ほど退却する部隊に紛れて、今は本陣の傍だろう。
こうなってしまうと、もはや彼に逃げ場はない。
彼女は1つため息を吐くと、サザーランドから降りた。
するとそこにはなんとゼロがいた。
あの部屋にあった仮面を持ち出せる人間。
つまり・・・

「C．C・・・」

「私もあいつに死なれては困るからな」

ジルが彼女の名前を呟くと、C．Cは仮面を外して素顔を見せた。

「それで・・・どうするの？」

「私がゼロとして囚になる、お前は逃げる時間を少し稼いでくれればいい」

「・・・わかったわ」

そうして2人はルルーシュを救出するべく、その場を後にした。

『全ナイトメアのパイロットに告げる！ハッチを開いて素顔を見せよ！』

「（なっ・・・！！コーネリアァッ！！）」

ルルーシュは唇を噛みしめた。
もう手の打ちようがない。
頭をフル回転させ、なんとか策を巡らすが、どれもこれもあまりに無謀すぎる。
自分の正体を知られるわけには・・・

『ハッチを開けよ！貴公の番だ！』

そしてついにルルーシュの番がきた。

「そっ・・それが、さっきの戦闘でハッチに不具合が・・・」

『わかった、ならばこちらで開けよう』

「っ・・・・！！」

『・・・さっさとせんか！』

「・・・・・・わかりました・・今すぐ『ゼロですっ！！ゼロを発見！！』なっ！？」

「ほお～・・やはりゼロはこういう性格か！」

読み通りの展開にコーネリアは口元に笑みを浮かべる。

「馬鹿なっ！！」

彼は驚いた。
自分はここにいるのだ。
だれがゼロを？
おそらくジルかC．Cのどちらかだろう。
仮面の隠し場所を知っているのはあの2人だ。
だが助かった。
これで・・・

『確保しろっ！第3、第5小隊騎乗！』

すかさずコーネリアの選任騎士であるギルフォードが指示を飛ばす。
ゼロは崩れた建物の瓦礫の山の上に立っており、歩兵や、ナイトメアを見下ろす形になっている。
部隊長が発砲命令を出し、兵たちが一斉掃射をすると、ゼロはそのまま後ろ向きで落ちて行った。

「追えっ！追うんだぁっ――！！」

それを見た部隊長は再びそう命令し、兵はゼロを追おうとするが、そこにはそれを阻む人間が立っていた。
その風貌はあまりに奇怪で、なぜか見るものすべてを恐怖させた。
黒のコール（フードが付いた西洋の僧衣）を身にまとい、フードを深くかぶっているため、影で顔は見えず、右手にサーベル、左手には変わった銃をもっている。
まるで死神を彷彿とさせるようだった。

「なっ！なんだ貴様っ！！」

「・・・・・・・・」

部隊長は、その人物のただならぬ雰囲気にしり込みしつつも、自らを奮い立たせるように声を張り上げた。

だがその人物は何も答えない。
しかも突然その人物が兵士たちの方へ、ものすごいスピードで走ってきた。

「うっ！撃てぇ！！」

その合図とともに兵士たちが一斉に発砲する。
しかし弾が当たることはなく、次々にかわされていく。

「そっ！！そんな馬鹿・・・ぐがっ！！」

そうして間合いを詰めたその人物は、兵士たちを急所をつき、次々と一撃で殺してゆく。
しかも一切の返り血すら浴びることもなく、僧衣には血のシミ1つ付いていない。

『このっ！！』

そんな様子を見ていたサザーランドに乗っていた兵士も、その人物を止めるべく、対人用のチェインガンを撃が、そこにいた歩兵を盾にされ、すんなりとかわされる。
その代わりにその人物は持っていた銃をサザーランドのコックピット部分に向けると、一発だけ発砲した。
すると弾丸は貫通し、サザーランドが沈黙する。

そしてさらに持っていたサーベルで再び兵士を切り捨ててゆく。
もはやそこは一方的な殺戮劇と化していた、

『ギルフォード卿！！第３、第５小隊が壊滅しましたっ！！』

「なにっ！？奇襲かっ！？」

『いいえ・・・それが、敵は独りで、しかも生身だと・・・』

グロースターに騎乗して指示を出していた彼は、部下のその報告を聞いて驚いた。
ありえない。
小隊といっても１個２０名はいる。
それが２個で計４０名の訓練された兵がたった一人に全滅させられるなんて・・・
しかもサザーランドもいたはずだ。
常識的に考えたら、生身の人間がナイトメア相手に敵うわけがない。

「・・・私が行く！！お前たちはここで待っていろ！！」

『なっ・・・・！！お待ちくださいギルフォード卿！！』

ギルフォードは部下の制止も聞かず、急ぎグロースターを走らせた。
ナイトメアを生身で倒すとしたら相当な手練≪てだれ≫だ。
物量が通じる相手ではないだろう。
それに部下がいれば逆に足手まといかもしれない。
そう思いながら彼は額に汗を浮かべた。

「なんだ！！あれは！！」

目の前の大モニターに映る、サザーランドから送られてくる映像を見ながら、コーネリアは目を見開いた。
たった一人の人間、しかも生身で、次々に兵士やナイトメアを無力化していくのだ。
そしてついには映像を送っていたサザーランドも沈黙し、映像が砂嵐に変わる。

「・・・あれはゼロの仲間なのか？」

「おそらくそうでしょう・・・追いかけようとする我々を阻む形で現れましたので、逃げるまでの時間稼ぎかと・・・」

ダールトンが冷静に分析する。
それを聞いたコーネリアは考えた。
確かにゼロは捕まえたいが、これ以上こちらの被害を増やして今捕まえる必要はない。
それに今回はこちらが勝ったのは明白の事実だ。
ふっ、と彼女は笑みを浮かべ、全軍に指示を出した。

「全軍！撤退せよ！無理にゼロを追う必要はない！繰り返す！全軍！撤退せよ！」

そんな時、彼女に通信が入った。
画面に映ったのはギルフォードだった。

『姫様っ！』

「どうしたギルフォード、今どこにいる？」

『ゼロを追っていた部隊が壊滅したとの報告があったので、その現場におります・・・これをご覧ください殿下』

そういって彼が映像を繋ぐ。
すると先ほどの謎の人物が行く手を塞ぐように道の真ん中で武器を持ち、仁王立ちしていた。

『いかがいたしますか？』

「・・・やれるか？ギルフォードよ」

『わかりません・・・相手の実力が相当なものであるとしか・・・』

「そうか・・・なら今は無理に仕掛ける必要はない、戻ってこい」

『イエス・ユア・ハイネス』

ギルフォードはそういうと、通信を切った。
その後、コーネリアは眉をひそめて呟く。

「何者なんだ・・・あれは・・・」

【地下・下水道】

偽のゼロのおかげでなんとか危機を脱したルルーシュは、ショルダーバックを持って、ゲットー地下の下水道を走っていた。

「（クロヴィスとは格が違う・・・それがコーネリアかっ・・・！）」

そんな中、突然彼は足を止めた。
なぜなら目の前に、地下に入る微かな光に照らされ、ゼロが立っていたからだ。

「・・・なぜ助けた？」

「だから言ったろう？死なれては困ると」

そう言ってC．Cは仮面を脱ぎ、素顔をさらす。
その背後には黒いコールのフードを脱いだジルもいた。

「条件が同じならば、負けはしなかったっ！！」

「負け惜しみだな・・それだけの条件を揃えるのも力の内だ」

悔しそうなルルーシュをよそに、C．Cは愉快そうに仮面を弄びながら言う。

「だったら揃えてやるさ・・・ブリタニアに負けない俺の軍をっ・・・！！人をっ！！国をっ！！」

「・・・・・・・・・・・・・」

ジルはそんなルルーシュを無言で見ていただけだった。

STAGE　07　【黒衣の女王】（後書き）

今回はジルの無双ですねｗｗ
戦闘の様子がうまく書けなくてすいませんｏｒｚ
ジルの黒のコール姿が想像しにくい方は、映画「グリムゾンリバー2」の超人的な体力を持つ僧衣の謎の暗殺者を想像してください。
モデル的に考えたのはあんな姿なんでｗ
あとはレイとジルの血筋についてですね。
まさかのまさかで皇族とつながっちゃいました。
どういうことかはまたのちのちのお楽しみということでｗ
ていうか目標にしている展開にうまくたどり着けるのか、最近心配になってきました…（笑）
まぁこれからも頑張っていくのでよろしくおねがいしますｍ（＿）ｍ

ＳＴＡＧＥ　０８　【ベティヴィア】（前書き）

あけましておめでとうございますっ！！
そろそろ忙しい時期に入りそうなんで、亀更新になってしまうかも…
でも処女作だし、ここまできたら完成させたいっ！！
３月になればおそらくどんどん更新していけるんでｗ
ということで誤字脱字の指摘お願いします。

STAGE　08　【ベティヴィア】

【装甲列車・旅客車両】

アシュフォード学園生徒会メンバーの一部は、アシュフォード家のコネで招待されたパーティー兼旅行のため、カワグチ湖へとむかっていた。

「私、トウキョウ租界を出るのって初めてなんですよ～！」

「ルルーシュも来られるとよかったのにねぇ？」

「うっ・・！！」

嬉しそうにはしゃぐシャーリーを、いつものようにミレイがからかう。

「よいではないか～！今宵は夜通し語り明かそうぞぉ、好きな男の子教えあったりとかさぁ～？」

「いるんですか・・・？会長にそんな人・・・」

「さーね♪レイはどうなの？」

「へっ？」

突如ミレイの毒牙が自分に向き、レイはきょとんとした。
ちなみに男子は彼1人であり、あとはミレイ、シャーリー、ニーナといったメンバーである。
ルルーシュとジルは用事があり、カレンは病気、スザクは軍務で、悲しいリヴァルは声がかかることすらなかった。
彼も軍務を理由に断るつもりだったが、スザクが「仕事は君の分も僕がやるから行ってきなよ！」と言って勝手にロイドに話をつけてしまったため、ミレイの熱心な誘いを断り切れず、今に至る。
傍から見れば、ハーレム状態のこの状況を羨むだろうが生憎、彼は特に女性に関しては興味がない。
いや、1人いる。

ジル・フランゾワース―・・・
自分と同じ記憶喪失の女性。
彼女とは何度か話したことがあり、そのたび、銀髪、色白の肌、アメジスト色の瞳など、外見も多々似ているところがあると感じる。
兄弟なのだろうか？
だとしたらやはり自分と同じく、皇族の血を引いているのだろう・・・

「・・・ねぇ・・ねぇ！！レイってばっ！！」

「えっ？」

ミレイに呼ばれ、我に返るレイ。
どうやら考え込みすぎて声が届いていなかったらしい。

「大丈夫？」

「うん、ただの考えごとしてただけ」

シャーリーが心配そうにレイの顔を覗き込む。
そんな彼女にレイは笑顔で答えた。
自分が記憶喪失だということは、ここにいる3人は知らない。
生徒会メンバーで知っているのは、スザクとジルとルルーシュだ。
ジルとルルーシュに関してはスザクが話してしまったらしい。

初めて話した時、彼女の方から自分に話してきたのを覚えている。
どうやら自分と違って過去が気になるらしい。
そして3人には自分が記憶喪失であることは、他に無駄に心配をかけるのはめんどくさいので口外しないように口止めしてある。

「それで！レイは誰が好み？シャーリー？ニーナ？カレン？ジル？それとも私っ！？」

「い・・いや、みんな好きだよ？」

そんなレイのことはお構いなしに、ミレイは彼に詰めより、目を輝かせて彼を問い詰める。
レイは彼女に多少引きながら、苦笑いしてはぐらかした。

「（スザク・・覚えておけよ・・・）」

と内心思うレイを、ニーナがちらちら恥ずかしそうに何度も見てたことに、彼はついぞ気づくことはなかった。

【トウキョウ租界・とある駐車場】

「なっ・・・！これはっ・・・！？」

ゼロに指定された場所に停まっていた一台の大型車両に乗り込んだ扇グループのメンバーは驚きの声をあげていた。
その車の中はあまりに豪華だった。
大型のテレビが備え付けられており、簡易的なキッチン、さらには二階まであるのだ。

「どうした？早く入れ・・・今日からここが私たちのアジトだ」

そう言ったゼロは車の奥で足を組んで座っており、その隣には黒いコールををまとい、そのフードを深くかぶって顔を隠した人物が立っていた。

「それはあんたが俺たちと組むと考えていいのか？」

そんな中、リーダーの扇要がゼロに尋ねた。

「あぁ・・我々は仲間だ」

「ところでそっちの奴は？」

扇がゼロの隣に立っている人物を指差した。
すると他のメンバーも気になったのか、車の中の見物をいったんやめ、ゼロの方を振り返る。

「彼女は“クイーン”・・・私の同志だ」

「彼女って・・・女っ！？」

「・・・・・・・」

扇グループのメンバーはゼロの発言に驚いた。
だがクイーンと呼ばれた彼女は、そこで一度も言葉を発することはなかった。

【カワグチ湖・コンベンションセンターホテル前】

「・・・ホテルジャック犯は日本解放戦線と名乗っており、ジェームズ議長を中心とする、サクラダイト配分会議のメンバーと居合わせた観光客、および数人の従業員を人質にとっています。犯行グループのリーダーは草壁中佐と名乗る旧日本軍人です・・・」

テレビではそんな放送が生中継で流されていた。
日本解放戦線は、唯一のホテルへの道、ライフライン用の地下トンネルにグラスゴーを改造したリニアカノンを設置しており、先行させた3機のサザーランドが、散弾一発で全滅した。
さらには人質の中には知られてはいないとはいえ、ユーフェミアがいたため、流石のコーネリアも強行突入の命令を出せず、状況は芳しくなかった。

【ホテル内・食糧庫】

「（はぁ～・・・来なきゃよかったぁ～・・・）」

レイはそんなことを1人思いながらホテル内の人質の中にいた。
周りの人々は怯えているのだが、何故か彼だけ胡坐を≪あぐら≫をかいて、緊張感をなく、あくびをしていた。

「あんた、なんでそんな緩いのよ・・・」

「そうですか？」

ミレイが小声で彼に言うと、レイは眠そうに目を擦り、はぐらかした。
彼は自分の異常な身体については知っていた。
だからおそらく頭を撃ち抜かれても、首がつながっていれば生きてはいるだろう。
するとそんな中、食糧庫の扉が開き、テロリストのメンバーが数人入ってきた。

「お前！！立て！！」

そしてその中の1人の男が、人質の中から適当に選び出し、連れてこうとする。
きっとブリタニア側の対応に業を煮やし、見せしめに殺すつもりなのだろう。
連れて行かれそうな男も、それがわかっているのkか、必死に抵抗している。
そしてそれを見ていたレイは、なにか閃いたらしく、ニヤリとして突然手を挙げた。

「「レイっ！？」」

その様子を見ていたミレイとシャーリーが驚いた。

「あの～、テロリストさん、よかったらその人じゃなくて僕を連れてってくれない？」

「「「はぁ？」」」

思わぬ彼の提案に驚くテロリストのメンバーたち。

「別にいいでしょ？それともなに？臆病な貧弱イレブンの方々は僕が怖いわけ？」

「ちょっとレイ・・っ！」

レイは彼らを挑発したように言う。
それをミレイが慌てて彼の服を引っ張り止めようとするが、すでに遅かった。

「なんだとっ！？いいだろう！！ならお前にビルから跳んでもらう！」

そう言って男がレイに近づく。
その間際、レイはミレイやシャーリーやニーナにウィンクしながら「後で助けるからもうちょい待っててね♪」と小声で耳打ちすると、そのままテロリストたちに連れていかれてしまった。

【ホテル外・特派ヘッドトレーラー付近】

「人質の学生って生徒会の人たちなんでしょ？交渉はまだ続けているから・・・」

事件は日が落ちてからも進展はなく、特派もその場で待機を命じられていた。
そしてセシルはそんな中でも、いつでも準備万端
で出撃できるように、ランスロットの整備をしながら、同じようにコックピットに乗り、待機しているスザクに話す。

「セシルさん、僕は組織の人間です・・個人的な感情よりも、組織の論理を優先します」

そう言ったスザクが、ふとランスロットの画面を見ると、ホテルの中層付近にある屋上で小さなものが動くのを見つけた。
すかさずファクトスピアで望遠してみると、そこには数人のテロリストに囲まれたレイの姿があった。

「レイっ！？」

「えっ！？レイ君！？」

スザクの言葉にセシルも身を乗り出して画面を見る。
すると確かに見慣れたいつもの銀髪のボサボサ頭の彼がいた。

「もしかして人質として・・・ってあれ？」

思わずセシルが首をひねった。
なぜかレイは少し下がると、まるで助走をつけるように思いっきり走り出したのだ。
そして次の瞬間―…

「「えぇ――――っ！！！」」

「なにっ！？いきなり何なのっ！？」

そのままジャンプして自ら飛び下りたレイに、スザクとセシルが驚き、さらにその声にロイドが驚き、トレーラーから顔を覗かせる。
ちなみに、特派のメンバーは彼がほぼ不死身だということは知らない。

「彼がどうかしたんですか？」

ロイドの後ろから、一緒に着ていたフラーも顔を覗かせた。

「あの・・その・・・テロリストにビルから突き落とされたって言うか・・私には自分から落ちたというより飛んだように見えたんですけど・・・」

「自分から？」

それを聞いたフラーは、疑問に思った。
彼の思考は家も一緒ということもあり、よく知っているつもりだ。
自分の思う彼とは、一見、他人に優しい善良な人間に見えるが、自分のためなら他人を犠牲にするだろう。
それに極端に結果にこだわり、ナイトメアのシューミレーションでも、常にスコアを気にし、毎回自らの記録を更新しないと気が済まないのだ。

そして最大の彼の構成要素は“欲”だ。
どんなものでも欲しいものならいつかは自分の物にする。
前に彼に夢についてきいたことがあったが、彼は笑顔で「う～ん・・・どうせなら神になるかな♪」なんて答えていた。
そんな人間が、自ら死を選ぶような行為をするだろうか？
むしろ彼なら一緒にいる人質など気にせず、テロリストを皆殺しにするだろう。

「あはぁ～！これで君のベティヴィアの出番はなくなっちゃったねぇ～？」

「ロイドさん！！なんですかその言い方は！！」

そんな風に考えているフラーをよそに、ロイドはなぜか嬉しそうだ。
そしてそれを見たセシルがその態度に怒る。

「えっ？なんかマズかった？」

「教えて差し上げましょうか・・？」

「いえ、遠慮させてもらいます」

「セシル女史、是非おねがいします」

ロイドに若干イラッとしたフラーは、そうセシルに言うと、いつもの鉄拳制裁が始まるのであった。

【Ｇ－１ベース内】

人質の中に、自分の妹であるユーフェミアがいるため、一刻も早くホテルジャックをなんとかしたいと考えているコーネリアは、自ら現場に赴き、指示を出していた。
そしてそんな中、見せしめとして人質がビルから落とされて殺されたという報告を聞き、彼女は現状確認のため外に出ようと、Ｇ－１内を出入り口に向かって、２人の男を連れて歩いていた。
まぁ“落とされた”と言うより“落ちた”の方が的確だが…

「見せしめとは・・野蛮人め！」

そんなこともつゆ知らず、そう苦々しく言った彼女の左側にガタイの良い男は、アンドレアス・ダールトン。
コーネリアの親衛隊でもあり、見かけによらず頭脳派の将軍だ。

「交渉に応じ、女子供だけでも先に解放させては？」

そしてコーネリアにそう進言する、右側にいたメガネをかけたいかにも実直そうな男は、ギルバード・G・P・ギルフォード。
彼女の選任騎士であり“帝国の先槍”との異名をもつコーネリアの懐刀だ。

「ダメだっ！！一度でも交渉に応じれば、テロと言う手段を肯定することになる！」

コーネリアはこうギルフォードの提案を却下すると、忌々しそうに唇を噛みしめた。
そんな時、１人の兵が彼女の元に慌ててやってくると「ゼロから連絡がっ！！」と、そう報告した。

【コンベンションセンターホテル・正面ゲート】

報告を受けたコーネリアがそこに赴くと、一台の中継車がゆっくりとこちらにむかってきた。
上には、ゼロとクイーンが乗っている。
コーネリアは自身専用のグロースターに乗り込み、彼らの行く手に立ちふさがった。

「また会えたなゼロ・・それとそっちのやつはだれだ？」

「彼女はクイーン・・私の騎士だ」

「彼女・・？女か？テロリスト風情が騎士とは良い御身分だな、まぁいい・・お前たちは日本解放戦線のメンバーだったのか？それとも協力するつもりか？しかし・・今はこちらの都合を優先する・・・義弟クロヴィスの仇・・ここで討たせてもらう！！」

そう言ってコーネリアは、特注の銃剣をゼロに向けた。
するとクイーンも腰のホルダーからマグナムを抜くと、彼女に向けた。
その場に緊張が走る。
しかし、意外なことにゼロがクイーンを止めた。

「よせ、クイーン・・・・コーネリア、どちらを選ぶ？死んだクロヴィスか、生きているユーフェミアか・・・」

ゼロがコーネリアにそう問うと、彼女の顔が驚きの表情に変わる。
人質の中にユーフェミアがいることは一切公表していない。
なのになぜこの男は知っているのか？
ハッタリの可能性もあるが、だとしてもおそらく自分がユーフェミアのせいで強行策に出れないことを知っている。
どうやらゼロは皇族のことについても詳しいらしい。

「ユーフェミアを救いだそう！私が！」

そしてゼロが続けたその言葉に、さらに彼女は驚いた。
自分に貸しでも作る気なのだろうか？

「ゼロ、なにを言っているかわからないな」

「救ってみせる！！私ならっ！！」

なぜこの男はそこまで言い切れるのだろうか？
コーネリアは疑問に思いながらも、ゼロを通すという苦肉の選択をした。
この男が行くことで次の人質殺害までにゆとりが生まれるだろう。
その間にホテルを急襲すれば、ゼロもまとめて始末できる・・・
そう考えた彼女は急ぎ、部下に指示を出した。

【特派ヘッドトレーラー】

「はぁ～い！！良い御指名ありがとぉ～ございまぁ～っす！！出していいってぇ～！！ランスロット！！トンネル内をリニアカノンに向かって突っ込めってさぁ～！！」

「ロイドさん！それってうちを囮にしてスキを作るってことですか

！？」

「うん～！混乱に乗じて親衛隊が突っ込むみたぁ～い！！」

「みたいってそんなっ！？」

通信でコーネリアの指示を聞いたロイドは、浮かれたように言う。
そしてセシルはその無謀な作戦内容と、あまりに軽率なロイドの態度に怒った。
そんな中フラーがロイドに提案する。

「私のベティヴィアならトンネル内のリニアカノンを破壊するのは簡単だと思いますが」

「でも君のデバイサー、ビルから落ちて死んじゃったんでしょ？」

「勝手に僕を殺さないでくれない？」

「レイっ！？」

「レイ君っ！？」

突然、しげみから現れたレイに、スザクとセシルが驚く。
まさかあの高さから落ちて生きているとは誰も思わないだろう。
服は濡れていて、所々破け、血も滲んでいるが、どこにも傷はないようだ。

「よく生きていましたね？」

「あぁ、まぁちょっとした手品さ♪結構痛かったけど・・・」

フラーは相変わらずの無表情だが、彼はそんな彼女の問いに笑顔で答える。

「そ・れ・でっ！！僕のベティヴィアの出番かな？」

セシルはほっと安心したように胸をなでおろし、スザクに至っては泣いている。
そしてロイドは残念そうにうなだれていた。

【コンベンションセンターホテル・地下パイプラインントンネル】

『チェスター中尉、作戦概要を説明します、プライムサーチによると、人質はホテルのミドルフロア、食糧貯蔵庫に閉じ込められている模様、響導兵器、ＬＸ－２　ベティヴィアは、ライフラインントンネル内に設置されたリニアカノン及び、ホテルの基礎ブロックを破壊し、ホテルを水没させる、人質のいる場所は８分はもつと推測される、救出、並びにテロリストの掃射は響導兵器Ｚ－０１　ランスロットと他の部隊が担当する、なお、リニアカノンと基礎ブロックの破壊にはＥＭＬを使用、設定はスナイプモード、出力は１０％に固定』

「イエス・マイ・ロード」

『計算上、ベティヴィアのＥＭＬなら、その出力で射出すれば、一発でリニアカノンと基礎ブロックを破壊可能です』

セシルとフラーのサポートを聞きながら、レイはトンネル内に降ろされるベティヴィアの中にいた。
彼はシュミレーターでこの機体に乗ることはあったが、実際に乗る

のはこれが初めてだ。
そのせいか今のレイはとてつもなく上機嫌・・・と思いきや、意外に冷静であった。
今から彼の行うのは狙撃なのだ。
その距離が長ければ長いほど、銃口が１度ずれただけで着弾ポイントが１ｍもずれる場合もある。
なので彼は全神経を指先に集中させていた。

『作戦開始まであと１２分、カウントダウンに入ります』

そして刻々とその時は近づいていた。

【コンベンションセンターホテル・一室】

「私と手を組むつもりはないか？」

ホテルの一室に案内され、今回の事件の首謀者である男、草壁中佐にゼロは最初にそう切り出した。
ここにいる人間達は、行動こそ浅はかではあるが、一応は元軍人である。
レジスタンスというまともな訓練すら受けていない人間よりは、これから組織を大きくしていきたいゼロにとって即戦力とは成り得るだろう。
だが彼はそこまでこの集団に期待はしていなかった。

「ならば素顔を見せてもらおうゼロ！無礼であろう！」

「わかった・・しかしその前に1つきかせて欲しい・・・お前はこの行動の果てに、何を求めている？」

「知れたことを！日本人がまだ死んでないことを、内外に知らしめるのだっ！！」

それを聞いたゼロは、やはりこの集団は切り捨てることにした。
その刹那、仮面のギミックを作動させ、彼はこの場にいた者に、ギアスで“死”という命令を与えた。

【地下・ライフライントンネル内】

作戦開始3分前―…

「フフフ・・・」

レイは1人、ベティヴィアの中で不敵に笑っていた。
接近戦で直に相手を殺れないのは残念だが、別に狙撃が嫌いというわけではない。
見えないところから襲ってくる敵に怯える相手を想像しただけで背筋がゾクゾクする。

彼は相手や自分が死のうが生きようがどうだっていいのだ。
ただ求めているのは自分をとんでもなく興奮させる刺激的なものだ。
今回はそれを望めそうにないが、まぁ仕方がない。
そんなことを思いながら、彼はコックピット内の計器を操作していた。

「第１目標までの距離７４．２３ｍ、第２目標までの距離１０１．０６ｍ、出力１０％に固定、重力補正０．０２、風速補正０．６、気温、湿度共に許容範囲内です」

『了解、ＬＸ－２　ベティヴィア、作戦開始』

「イエス・マイ・ロード」

そしてレイは、コックピット内の精密射撃用スナイプシステムを構え、引き金に手をかける。
ファクトスピアを作動させ、スコープを覗き、狙いを定めると、いっきのその引き金を引いた。
その瞬間、ＥＭＬから発射された弾丸は、リニアカノンを貫通し、その先にある基礎ブロックまでも破壊した。

『基礎ブロックを破壊、ホテルの水没を確認、響導兵器、Ｚ－０１ランスロット発進』

「発進！！」

ホテルの水没を合図とし、ランスロットが先行、ギルフォードの部隊が正面の橋から混乱に乗じて突入する。
だがそんなスザクの前に映し出された光景は、絶望的なものだった。
彼のランスロットがゼロをとらえたその時、突然人質がいるフロア一帯が爆発したのだ。

「ユフィィィッッ――――――――！！！！！！！」

「みんなぁぁぁっっ――――――――！！！！！！！」

その様子を見たコーネリアが思わず叫ぶ。
そしてスザクはロイドの制止も聞かず、崩れゆくビルに突っ込んでいった。

【コンベンションセンターホテル・一室】

数分前―…

「副総督に就任されたと聞きました・・ユーフェミア皇女殿下」

「喜ぶことではありません」

「そう・・クロヴィスが死んだからですね・・・？私が殺した・・・」

「っ・・・・！！」

草壁ら解放戦線のメンバーが死んだその部屋で、ゼロとユーフェミアは対峙していた。
彼女は、ニーナが連れて行かれそうなのを黙って見ていることができず、自ら名乗り出て、この部屋に連れてこられたのだ。
しかしその時には草壁とその場にいたメンバーはすでに死んでおり、そこにいたゼロと鉢合わせしたという形だ。

「クロヴィスはシンジュクで日本人の虐殺命じた・・・」

「だから殺したのですか・・・？」

「いいや・・・」

「ではなぜっ！？」

「あの男が、ブリタニア皇帝の子供だから」

「えっ！？」

「そういえば・・あなたもそうでしたね・・・」

そう言ったゼロは懐に持っていた銃を彼女に向けた。
だが丁度その時、血に染まったサーベルを右手に持ったクイーンが部屋に入ってきた。

「解放戦線のメンバーは？」

「始末した」

「そうか・・・つくづく救いようのない連中だ・・・まぁいい・・・彼女も連れて行ってくれ」

クイーンはユーフェミアの腕をつかむと、部屋から連れ出した。

「あなたは・・・？」

そんなクイーンにユーフェミアはそう尋ねたが、彼女は黙ったままだ。
フードに隠れていて顔は見えないが、先ほどの声からして女性だろう。
その後も脱出艇に着くまでいくつか質問したが、ついぞ返事が返ってくることはなかった。

【コンベンションセンターホテル跡】

ビルが崩れ、大量の砂埃が舞う。
爆発の影響か、所々で炎も上がっていた。
そしてビルの崩壊する中に突っ込んでいったランスロットは、なんとか無事で立っており、ロイドとセシルがほっと胸を撫でおろす。
だがスザクが己の無事を喜ぶことはなかった。

「救えなかった・・・・・・僕は・・僕はっ・・・・またっ！！」

彼は友達さえ救えない無力な自分を恨んだ。
こんなことを引き起こしたくなくて軍人になったに、それを嘲笑うかのように次々に消えて行く大切な人たち。
そんなことを思い、彼が絶望していたその時、湖の方にいくつもの生体反応があった。
そこには脱出艇に乗った人質たちと、クルーザーの甲板に立つゼロがいた。
そして彼の左隣にはクイーンが立ち、周りには数人の同じ黒いジャケットにバイザーて顔を隠した人々がいる。
すると突如複数のライトが彼らを照らす。

『人々よ！我らを恐れ！求めるがいい！』

『我らの名は・・黒の騎士団！！』

『我々黒の騎士団は、武器を持たない全ての者の味方である！』

『私は戦いを否定しない・・しかし、強い者が弱い者を一方的に殺すことは断じて許さないっ！！』

『討っていいのは、討たれる覚悟のある奴だけだっ！！』

『力ある者よ、我を恐れよ！』

『力なき者よ、我を求めよ！』

『世界はっ！！我々黒の騎士団がっ・・裁くっ！！！』

こうしてゼロとクイーン――――ルルーシュとジルの反逆は狼煙を上げた。

STAGE　08　【ベティヴィア】（後書き）

この話のタイトルを【黒の騎士団】にしようか【ベティヴィア】にしようかすごく迷った…
だけどきっとこの話の主役はベティヴィアだっ！！と思いこれにしましたw
まぁ初めてカタカナ一色ってのも新鮮かなって思ったんもありますが。
そして見事に文量の記録を更新しましたw
自分的には１２ＫＢ～２０ＫＢ辺りが読みやすいのかなと思って書いてるので、１９ＫＢはギリギリなんですね。
あと皆さんはお気づきになってるかもしれませんが、作者はとても人の感情やその場の風景を文章にするのが苦手ですw
かといって人物の会話が得意と言うわけでもないんですけど…（汗）
ともかくそのせいで異様に会話が多いんですね。
えっ？だからどうしたって？
いや、一応ここはわたくしめの文才のなさを強調したしましょうと思いまして…
それで最近はＦａｔｅ／Ｚｅｒｏのアニメの影響で、いろいろサーヴァントの設定まで考える始末なんですよ。
もしこの作品が軌道に乗ったらとうこうしよっかなぁ…？
あぁ、それでついでにオリＫＭＦの話を…（？ついでかよっ！！）
いろいろコードギアスの兵器について解説を調べて見たら、作品の中の銃って今回出てきたリニアカノンについても、みんなコイルガンの類のようですね。
レールガンのことは摩擦熱だのプラズマだの難しい話ばっかだったので、「いろいろな問題を解決し、なんとか作った最強兵器」という形で自分なりに解釈することにしました。

だから不備は多々あると思いますが、気にしないでくださいw
あとはジルですね。
ゼロみたいにコードネームが欲しかったんで、彼女にふさわしいコードネームってなにかな？と考えた結果“クイーン”と言うコードネームにたどり着いたんですね。
それでは今回はこの辺でノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1377z/

コードギアス 反逆のルルーシュ 〜銀の翼〜

2012年1月3日02時48分発行